ＦＧＯ　虚構群雄都市　横浜　異界の騎士

うぇい００

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がつくと身に覚えのない部屋にいた。
何故、自分がここにいるのか？
どの様にしてこの場所にきたのか？
彼はいくら考えても答えはでなかった。
何故なら彼は記憶を無くしていたから。
そんな彼の元にキャスターのサーヴァントが現れ、彼女は告げた。
「貴方はカルデアのマスターです」
いわゆる、僕の考えたオリジナル特異点
他サイトにも投稿してますが　こっちにも
既存サーヴァントでまともにでてくるのは沖田くらい

目次

8 65
7 57
6 48
5 40
4 31
3 19
2 10
1 1

1

目が覚めると暗い部屋の中にいた。
窓の外を眺めると、街中の灯りが眩しく思えた。
今までに何度もこの光景を見てきたというのにオレはこの光景に感動を覚えた。これらの灯りは人々の命だ。
その灯りの奥には人が日常を彩っているのだろう。仕事に励むもの、家族と過ごしている者。
そして、道を照らす外灯はそこを歩く人々の家路を、日常の安寧へと赴く人々を彩っている。
素晴らしい。なんと素晴らしいのだろう。オレは、この光景をずっと眺めていたいと思った。
ふと、思いつく事があった。
それらを眺めているオレは一体ここで何をしているのだろうかと。
オレは、ため息をついて部屋の中を見渡したが、自分が何故ここに居るのか分からなかった。
この部屋の風景に見覚えはない。全くといっていい程記憶にないのだ。
頭が軋んだ。別の事を考えようと思考をシフトする。
が、何も思いつかない。仕方がないので思考を元に戻した。
改めて考えてみよう。なぜ自分はここにいるのだろうと？
部屋の中をぐるぐると回る。部屋の大きさはおおよそ八畳ほどだろうか。少し、広いと感じた。
だが、それ以外は何も湧いては出てこないのだ。
思い出そう。そう、まず簡単な事からだ。どうやってここに来たかをだ。
どうやってだ？車？自転車？電車？徒歩か？駄目だ。思い出せない。
ここに来るまでの行動の一切も消失してしまっている。
では、ここがどこかを考察してみよう。
部屋の構造からしてここはきっと誰かの部屋だ。だが、自分の部屋

ではない事ぐらい分かる。
ならば、オレはここに用事があったのではないか？知人、友人の部屋ではないか？
だが、何も出てこない。オレには友人も知人もいなかった。
いや、いなかったというには語弊がある。いた筈なんだ。オレにも友人や知人が。
きっと、外を歩く人々の様に友人と酒を飲んだり、仕事をしたり、もしかしたら家族が家で待っているのかも知れない。
だが、そんな記憶はオレにはなかった。
友人の顔も自分がしている仕事も家族の顔もオレの頭の中には何一つ存在もしていないのだ。
オレの身体から恐怖という名の汗が滲んだ。足が震える。
縋るようにして部屋の隅にあるゆったりとした大きめのソファに腰を下ろして天井を見上げた。
冷静になろう。だが、オレの右足は不安からか小刻みに震えて気を散らしてくる。
まるで、異世界に放り込まれた気分だった。
何も知らないこの世界でオレは一体何をしているんだろうかと。
部屋の隅にある柱時計の音が妙に響き渡る。まるで、不安を更にかき乱すように。
その音はオレの苛立ちを増長させる。
考えても仕方がない。何も知らないのだから。
オレは、立ちあがり外に出ようとした。そんな事をしても仕方がない。ここがどこだか分からないのだから。
だからといってじっとしていられる程、冷静ではなかった。
幸いにも扉がある。外にでれば何かを思い出すかもしれない。震える足に鞭を打つようにして一歩、また一歩と扉に歩み寄った。
すると、その扉がひとりでに開いたのだ。
思わず後ずさった。そんなオレとは対照的に扉の奥からは女の人が笑みを浮かべながら部屋に入ってきた。
「だ、誰だ？」

驚きの余り思わず声を上げる。
「目が覚めたのですね、マスター」
彼女はその笑みを絶やす事なく言った。
「マ、マスター?なんの事だ!」
震える声で彼女を威嚇した。だが、微かに思考に引っ掛かりを感じたのも確かであった。
その言葉に、声に聞き覚えがあったからだ。
「ふむ。やはり忘れてしまっているのですね。悲しい。私は悲しい」
彼女はオレから視線を外して俯いた。
彼女はオレの事を知っている。そういう口ぶりだ。では、何故オレがここにいるのか。
ここが、どこなのか?という疑問に答えてくれるに違いない。そう思えた。
「えっと、そのマスターっていうのはオレの事でいいんだよね?それより、教えてくれ。ここが一体どこなんだ?どうして、オレはここにいる?」
「ええ、その質問には後にお答えします。ですがマスター、ご自分のことは覚えていらっしゃいますか?」
彼女は俯いたままいった。
「一体何を言っているんだ!そんな事……」
当たり前だ。とオレは言えなかった。言葉が喉で詰まって声が出ない。完全に言い淀んでしまった。
彼女の言葉でオレの思考は完全に停止した。
何故、こんな当たり前の事すらも思い出そうとしなかったのだろう。
いや、当たり前だからこそ、それを完全に排除していたのだ。
恐怖だ。オレは頭の中を真っ黒なペンキで塗りつぶされたみたいだった。
自分が何者かそもそも分からなかったのだ。
自分の名前も顔も経歴も、全て自身の記憶に存在しなかった。
自分が何者か分からないという現実は非情にも重くのしかかった。

外の景色を映す筈の窓ガラスには何も映らない。
ただ、残酷な現実に目を丸くした筈のオレの顔が――――。
「な……んだ?!」
映る筈だった。瞬間、頭がスパークする。驚愕の連続にオレの思考が追いつかない。
それもそうだ。窓ガラスに映るのはオレの顔ではなかった。
まるで、ぶつ切りにされたパイナップルの様な奇怪なモノがそこには映し出されていたからだ。
「うぅっ!」
思わず嗚咽を漏らす。
部屋に入ってきた女性はオレの背後で膝を折り、背中を撫でてくれた。
「ご、ごめん。取り乱した」
「いえ、お気になさらず。お気持ちはお察しします。気が楽になるまでこうしていますので」
女性はオレに微笑みを投げかける。思わず鼓動が早くなった。
この女性の献身的な態度に胸を打たれたのだ。
そう思うと彼女から視線を外せなくなってた。
すらりと伸びた四肢は艶やかで美しく、その顔を気品に溢れていた。
美しい。と称賛を送りたくなるほどに彼女は美しかったのだ。
「ありがとう。幾分かは落ち着いたよ。早速で申し訳ないけど聞かせてくれるかな?ここは何処で、そもそもオレは何者なんだ?」
「ええ、お答えします。マスター」
オレは立ち上がりソファに腰掛けると、、彼女も対面のソファに座った。
無意識に視線が彼女のしなやかな足にのびてしまう。オレは、理性を無理矢理に働かせる。
取り繕う様にオレは一度咳ばらいをすると、笑みを浮かべた彼女と視線が交錯した。
「じゃ、教えてくれ」

「はい、マスター。まずここは、特異点になります。そう敢えて名をつけるならば虚構群雄都市、横浜。とでもいいましょうか」
「虚構群雄都市……横浜」
　彼女の言葉を復唱する。
「ええ、この地は些か特異点としては異常です。この特異点に聖杯は在りません。この横浜に召喚されたサーヴァントは全六騎。最後の一人となったサーヴァントに聖杯がもたらされます。つまりは、聖杯戦争の再現。この特異点は、ただの英霊同士の殺し合いなのです」
　彼女は深刻そうな顔を浮かべた。だが、オレはまるで内容についていけはしなかった。
　聞き覚えのない単語の羅列に頭痛が加速する。オレは、こめかみ辺りをおさえる様にして彼女に問う。
「じゃあ、君もその聖杯戦争に参加しているのか？そもそも、君とオレはどういった関係なんだい？」
「いえ、私は直接的な戦闘力は持ち合わせていません。申し訳ありませんが。ですが、先ほど言ったように
　この特異点は異常です。本来、聖杯戦争は七騎のサーヴァントそして七人のマスターによって行われますが、
　この地にマスターと言えるのは貴方ぐらいでしょうね」
「オレはそんなに特異な人間だっていうのかい？」
「ええ、なにしろ貴方は世界を救ったカルデアのマスターなのですから」
　彼女の言葉にまたしても頭痛がオレの頭をより強く刺激した。
　カルデア。その言葉に聞き覚えがあったのだ。記憶の奥底が地底から這い出る様にオレの脳を割れんばかりに引き裂こうともがき始める。
「カル……デア……」
　記憶が逆流する。
　数多の英雄達とオレは世界を掛けて――――。
「うっ――――」
　頭痛がより酷くなる。座っているだけでオレの体内から汗が滲み

出てきた。
女性はオレの顔色で異変に気づいたのだろうか、傍らにくると肩を優しく抱いてくれた。
「無理なさらぬように。貴方の記憶は私がきっと思い出させます。では、私が語りましょう。
貴方がこの地を如何にして訪れ、初めに何をしたのかを。ゆっくり、ゆっくり思い出してください。
世界の救世主、カルデアのマスター藤丸立香よ」
そう言って彼女はまるで吟遊詩人の様に語り始めた。
＊＊＊＊＊＊
「――――ぱい――――だ――――すか――――」
「駄目だ。ノイズが酷すぎる。落ち着いた所でもう一度やってみよう」
藤丸立香は困惑した。亜種特異点が発生しレイシフトを行ったまでは良かったが、今の惨状は全くの予定外だったからだ。
カルデアで観測した特異点。日本の横浜で発生した特異点に早速レイシフトを行ったのだが、一緒に連れてくる筈だったサーヴァント達は特異点に弾かれ藤丸立香は一人でこの地に降り立った。
彼の眼前に広がるのはビル群。自身も背の高い建物の屋上に居るおかげで崖下の状況を垣間見る事が出来た。
幸運な事に新宿の時とは違い街の営みは普通と彼は判断する。
人形や魔術使いが闊歩している様子もなく、ごくごく有り触れた人々の日常があった。
一見、ここが特異点かと不思議に思う程、平和だなと彼は感じたのだった。
だが、カルデアとの通信が不安定なのは一抹の不安を抱かざる得ない。
自身に対するサポートの一切がなくサーヴァントもいないこの状態では、自身の命が幾つあっても足りたものではない。しかし、行動しなくては何も始まらない現状である以上、藤丸立香は屋上を出るべく扉へと足を向けた。

が、その軽やかな足取りは一瞬で終わりを迎えた。
「何か――――来る!?」
自身の両肩が震えた。それは何かに気圧されたからだ。
間違いなく自身に近づいてくる憎悪の気配はサーヴァントの放つそれだった。
自らと共に戦うサーヴァントは現状いない。
できる事と言えば全力で逃げ出す事ぐらい。だが、それを踏み出す足が動かない。
恐怖ではない。藤丸立香は悟る。既に逃げ場がない事を。
「アぁあああああああ」
轟音と共にそれは藤丸のいる屋上へと着地した。
雄たけびをあげ、その眼光は鋭く彼を睨みつけた。
「サーヴァント……きっと、バーサーカーだろうね」
藤丸はそんな自身の感想を口にする事ぐらいしか出来なかった。
だが、彼女。そう目の前に居る相対するサーヴァントには勇ましさは感じなかった。
凶化されているとはいえ、武人の様な姿には見えない。いや、武人ではない故に凶化されているのであろう。
目の前のサーヴァントは、一見すれば『美しかったであろう』と言えるドレスを纏っている。美しかったであろうという言葉の意味は簡単だ。そのドレスは所々に欠損が見られ、酷く汚れていた。
そして、何よりも特徴的なのはその片腕に担がれた身の丈以上もある大きな棺。
赤黒い色を放つそれをサーヴァントである女は軽々とそれを振り回し、それを藤丸を目掛けて叩きつけた。
「うわっ!?」
咄嗟に飛び退いた藤丸だったがその衝撃の余波で彼の身体が宙を舞ってからコンクリートに叩きつけられる。
「アあああああああああああああああ」
依然として咆哮をあげるサーヴァントに彼が出来る手などない。
藤丸はつくづく思い知らされる事になる。カルデアのサーヴァン

トが居なければ自分の力などゼロに等しいという事を。
見上げる。藤丸立香は、地面に伏したまま自らの命を奪おうとする狂気を見上げる。
「――――ごめん、マシュ」
「諦めるの早すぎですよ！」
藤丸に降りかかる筈だった鉄塊の様な棺は彼を押しつぶす事はなかった。
彼の目の前には、刀で棺を受け止める少女の姿。
そして、また別の女の声が後方から藤丸に掛けられる。
「よかった。まだ無事の様でしたね、カルデアのマスター。助けに来ました」
藤丸が振り返る。背後には美しい装飾で彩られたドレスを纏った女のサーヴァント。
「た、助かったよ、ありがとう。ええと――――」
「キャスター。そうですね、横浜のキャスターとでも名乗っておきましょうか」
そう言って横浜のキャスターは藤丸の手を取り引き起こす。
「ちょっとちょっと、私の援護もしてくださいよ」
バーサーカーの一撃を食い止めた少女は、依然としてその猛攻を凌いでいた。
「ご、ごめん」
藤丸は即座に魔力を行使し、刀を持った少女の能力を底上げした。
瞬間、少女の振り上げた刀はバーサーカーの振り下ろした棺を押しのけると、すぐさまに懐に飛び込み刀を振り下ろした。
「アあああぁあああ。返せ……返せ……お前が奪ったんだろおおおぉおおお」
刀による傷を受けたにも関わらずバーサーカーの戦意も勢いも止まらない。
彼女は怒りの形相を浮かべ、再度藤丸に向けて突撃を行う。
「あぁ今のでも止まらないんですか!?ここは一旦、引きましょう」
「ええ、私も同意見です。マスター？」

「あぁ、逃げよう」
キャスターは藤丸を抱えながら屋上から飛び跳ね、刀を持った少女もそれに続いた。
その場に取り残されたバーサーカーは一人咆哮をあげたのだった。
＊
程なく距離を走り続け路地裏に身を隠した藤丸は壁に背を預けて呼吸を整えていた。
「ありがとう。助かったよキャスターそれと、沖田総司でいいのかな？」
藤丸は刀を持った少女に向かっていった。
「むっ、私の真名をご存知でしたか？え？カルデアにも私がいると？まぁ、今の私はそっちの記憶はないので別人と考えてもらって結構ですよ」
「あぁ、そうするよ。ええと、キャスターの方は初めましてだね。えっと、真名は」
「そうですね。真名については私は伏せさせていただきます。ですが、然るべき時に必ず開示する事を約束します」
キャスターは俯き気味に言い、藤丸もそれ以上真名についての追及は避けた。
「それで、この特異点で何か異常な事ってある？」
「異常も何も今この地、横浜で行われているのは聖杯戦争です。ですが本来の聖杯戦争とは違うのはマスターが居ない事。貴方はこの聖杯戦争で唯一のマスターという事になりますね」
そういってキャスターは微笑んだ。

2

「これが私とマスターの最初の出会いです。何か思い出せましたか？」

キャスターの問いにオレは返事を返す事が出来なかった。

彼女の語った内容には確かに嘘偽りはないように思えた。そんな事があったかもしれないと、そんな気がしたのも確かだ。

だが、確証はもてない。未だに漠然とした記憶に溺れそうになる気分だった。

それから、オレが如何にして世界を救ったかを説明された。いきなりスケールのデカいを話をされて頭はパンクしそうだった。

サーヴァント、カルデア、単語の羅列に頭痛が加速する。

「少し外の空気を吸いにいきたい。一人になりたいんだ。いいかな？」

「――ええ。引き止める理由はありません。ですが、危険だという事は理解してください。マスターの心中も察しているつもりです。何かあれば令呪の使用もお願いします」

キャスターなら引き止めると思った。これが、内心抱いた感情だ。

だが、彼女の選択に今は感謝しなければならない。オレは、彼女の横を通り過ぎると扉を開け部屋を出る。

部屋の外は廊下が続いておりこの部屋は丁度突き当りに当たるようだった。

対面する様に奥には階段が見受けられ、自分が出てきた部屋以外にも幾つか部屋がある。

オレは、階段を降りていく。この建物も屋上があるのかと思ったが上へと続くものがなかったため、ひたすらに石でできたそれを駆け足で下る。

「結構あるな……」

小言を漏らしつつもオレはロビーらしき場所へと辿り着いた。まるで、西洋の城を思わせる豪華の装飾に真っ赤な絨毯が敷かれていた。

額から溢れ出る汗を拭いながらロビーを眺める。豪華絢爛と言わざるを得ない光景に目を奪われたからだ。
「外にでてみよう」
広いロビーを横切り重厚な鉄製の扉を開けると、外の景色が視界を覆った。
先ほど、窓の外でみた光景が広がり安堵する。もし、この扉の向こうに地獄絵図の様な光景が浮かんでいたらと不安を抱いていたからだ。
正直に言えば、キャスターの話は半信半疑に受け止めている。
何せ、オレは自分自身が藤丸立香と認識できていないからだ。
外へと足を踏み出す。自分以外の人間の姿は見えない。それに、先ほど心を奪われた様な人々の灯りも今は小さくなっていた。夕闇に染まった街を彩るのは僅かな外灯の光だけだ。
その灯りを頼りにオレは道沿いに歩き始める。自分以外にここで音を発しているものはいない。ただ、歩くたびに自分の足音がビルで反射しているのか甲高く聞こえ耳を突いてくる。
時折、吹く風が冷たく感じられた。
「もう、みんな寝てしまったのだろうか？」
他にも自分を知っている人が居るかもしれないと、微かに抱いていた希望も打ち砕かれた。オレは沈黙した街をひたすら歩き続けた。
時折、光が零れる民家が幾つか見受けられたが流石に一般家庭に押し入り事情を話すのも気が引ける。民家から聞こえる家族の談笑する微笑ましい笑い声がオレの心に突き刺さった。オレにもあんな風に笑いあった仲間や家族が居たかもしれない。
そう考えるだけで空しさが込み上げてきた。
ふと、一つのビルを見上げた。掲げられた看板は夕闇の暗さもあり文字が上手く読み取れない。辛うじて『占星学教室』という文字だけ見て取れた。
「占星学？」
看板の文字を声に出した。この言葉に自分の記憶が刺激される事はなかったが興味を引かれるには十分だった。それに、このビルの一

フロアだけ灯りが付いている。
「行ってみるか」
口にするより早くオレの足はそのビルへと向けられていた。フロアに入り該当する階へ向かおうとするも、エレベーターがない事に気づき仕方なく階段を使用する事にした。
コンクリート製の階段を五階まで上がると流石に息を荒げる事となった。先ほどまで自分が居た部屋に比べれば古臭さはどうしても否めなかった。かび臭さが鼻を劈く。
部屋の扉の前まで来ると些か胡散臭さも込み上げてくる。
扉のドアノブは腐りかけ、もはや意味すら消失している様に思えた。
やはり今日はよそうか、この扉の奥にはキャスターの様なサーヴァントが潜んでいるかもしれない。
気落ちし、引き返そうとした時だ。ドアの中から咳払いがした。
それは、少しばかりオレに安堵を与えてくれた。サーヴァントでも咳払いするんだなと間抜けな事を考えてしまう。
そんな愛嬌というか人間らしさを中から感じた為か、少し躊躇いながらも扉を押した。
案の定ドアノブは捻ればその分クルクルと回り、役目を全くと言っていい程全うしていなかった。
室内は雑多だった。床の至る所に本が積まれている。
部屋の中には一人の若い男が居た。彼はこちらに背を向けている。
「えぇと、表の占星学っていう看板をみてお伺いしたのですが？」
「そうですか？で、僕に何か？」
すました顔で彼はいった。
「え？あぁ……そうですね」
しまった。中に入る事ばかりで話す事など一切考えていなかった。オレは彼を前にして首を捻ってしまう。
「とりあえず掛けたらどうです？久しぶりに人と話す気がしますよ、ええと、紅茶でいいかしら」
言われるがままオレはソファに腰を落とし目の前に差し出された

紅茶を一口飲んだ。
「で、君をなんと呼べばいいかな？」
「あ……そうですね。藤丸立香です。一応」
いきなりの質問に戸惑った。いや当然の質問だが記憶喪失のオレにとってその質問は些か苦痛だった。
「一応？……なるほど、そういう試みか。全く、誰だこんな下らない催しを考えたのは」
男は突然苛立ち癇癪を起した。そんな光景をオレはソファに座ったまま眺める事しか出来なかった。一分ほど彼は部屋をグルグルと回り始め、急に大声をあげたかと思うと何食わぬ顔でソファにまた腰を下ろした。
オレが呆気にとられていると彼は口を開いた。
「すまない。で、なんだっけ？あぁそうだな自己紹介だったか。ところで君には僕がどう見える？」
「ええと」
思わず言い淀んでしまった。行動が些か不気味に思えたが改めて彼を見てみると思わず声を上げてしまった。
「サ、サーヴァントなんですか？貴方も!?」
「あぁ、その通り。僕はサーヴァントさ。そして、君はサーヴァントではない。という事は君は魔術師ってやつなんだろうね」
「え、ええ。貴方がどこまで把握しているか分かりませんが。ここは、特異点と呼ばれる物で――――」
オレは、先ほどキャスターから聞かされた事をべらべらと得意げに語って見せた。
彼は時折、大きく頷いたり、へぇ、と大袈裟に驚いて見せた。
だが、自分自身でも驚きがある。自分が説明された時は意味の分からない単語の羅列だと思っていたが、いざ自分で話してみると不思議と言葉の意味が理解できた。やはり、自身の記憶の奥底にこれらが眠っていたのだと実感し、自分という存在に現実味が増してきた。
それが、嬉しくなってしまったのかオレは自身が記憶喪失だという事も話してしまっていた。勿論、キャスターの事も洗いざらい喋って

いた。
「なるほどね、カルデア、人類継続保障機関。全く大層な名前じゃないか。彼らまぁ君もだがね、一体何の権利があって人の生活を保障するだなんていえるのだろうね。まぁ僕には余り関係なさそうだ」
「それが関係あるんだよ。だって貴方はサーヴァントなんでしょう？この特異点に召喚された。この特異点のサーヴァントは全部で六騎。なら――」
「それはない。僕はその六騎に含まれない」
　オレの言葉を遮り彼は堂々とした顔で言った。
「なぜ？」
「簡単なことだよ。正確に言えば僕はサーヴァントではないからね」
「えっでも？」
「あぁ僕はシャドウサーヴァントってやつらしい。それに僕はそんな英雄だなんて言う枠組みに組み込んでほしくはない」
「シャドウサーヴァント……じゃあ一体何をここで？」
「さあ？この横浜という地は僕がかつて生活していた場所でね。そこまで未練はなかった筈だけど何だろうな、そういった世間の感情というか思念が僕を呼び出してしまったんだろう」
　彼は肩を竦めた。
　ここで、オレはごく当たり前の事を聞き忘れていた事を思い出し、あっ、と声を上げた。
　彼は急に声をあげたオレをみて微かに微笑んだように見えた。
「そうだ、そうだよ。名前、真名。クラスはなんですか？シャドウサーヴァントといえそういった枠にははまっているんじゃない？」
「その質問に意味はあるのかい？記憶喪失なとこまで僕の友人と君は少しだけ似ているな。では、敢えて友人に言った言葉と同じ言葉を君にも言おうじゃないか。名前なんてものは記号に過ぎないよ。そんなものに拘るのは俗物の証さ。が、ここはそういう場所だという事も僕は十分に理解しているので敢えてそのルールに従って名乗ろうではないか。僕は……そうだな、セイバーとでも名乗っておこう」
　小難しい事は言わずに素直に言えばいいのにと思ったが、これをい

うと何だか怒られそうな気がしたのでオレはその件については口を挟まなかった。だが、既にキャスターの話だとオレの味方にはセイバーの沖田総司が居るわけでこれでは被ってしまう。

その事を彼に伝えると、目を丸くして驚いた。

「君は何を言っているんだ。君は数多の英霊を引き連れて世界を救ったのだろう？ならば一々彼らをクラス名で呼ぶわけじゃない。誰か分からなくなるからね。ならば、元より知っているサーヴァント達は真名とやらで呼べばいいじゃないか。どうしてもというなら僕はライダーと名乗ってもいいけど。本来、僕の様なタイプはキャスターなんだろうけどね、生憎と魔術とやらはからっきし」

「え、ああじゃあ、セイバーって呼ぶことにするよ」

「あぁ、それでいい」

セイバーは満足した様子でとっくに冷えた紅茶を胃の中に流し込むと、冷めてやがる、と独り言を吐き捨てた。

「ところで、占星学っていうのは何ですか？」

「あぁ、そうだね占いの一種だよ。君も占ってあげようか？なら、生年月日と誕生時間、それと出生地を教えてください」

そう言われてもオレにそんな記憶がなかった。困り果てたオレの顔を見たセイバーは、そうか、といい続けてこういった。

「あぁ、お金の心配なら無用です。僕と君が友人になれば問題ないでしょう。あー、それは違うだろうね。僕と君とならきっとこういう関係でなければならない。サーヴァントと魔術師。なら、契約しましょう。これで、僕と君は晴れてお友達。友人からお金を巻き上げるつもりはないので安心してくれていい」

などと見当違いの事を言い出したのでオレは思わず吹き出してしまった。

セイバーは、何がおかしいといいたそうにオレを凝視している。

「あぁ、なら契約しよう。オレも目を覚ましてから初めての友人だ。よろしく、セイバー」

自分で言い出したことにも関わらずセイバーは少し驚いた表情をした。だが、直ぐにオレの差し出した右手を軽く握り返し背を向け

た。
「ところで、君は音楽とか聞きますか？」
「音楽？」
　オレが首を傾げるとセイバーは奥からラッパの付いた台のような物と真っ黒な薄い円盤状の物を持ってきた。
「僕の居た時代は丁度ＣＤが流通し始めた時期なんだが、まだまだ此奴は現役だったのさ。でも、今の時代はもっと進んでいるんだろう？ＣＤすら廃れているっていうじゃない。全く時代の流れは凄まじいね。人間社会は機械化が進んでいくのだろうけど、流石に哀愁を感じずにはいられない。それより、これがあって良かったよ。この部屋は僕の部屋に有ったものが全てある。その一点だけは感謝しているよ」
　セイバーは独り言をオレに捲し立てた。一方のオレはその機械に中々ピンと来なかった。
　そんなオレの様子を察したのかセイバーは少し肩を落とした。
「やはり君は現代の人間の様だね。残念ながら君に馴染みのある曲を僕は持ち合わせていない様だ。ところで、音楽というモノは記憶を呼び覚ますのには中々のツールでね。聴覚からの刺激というものは大脳辺縁系に伝わる事が分かっているんだ。それは、記憶を司る海馬にも多く刺激を与える。つまり、記憶の一部といものは、音や音楽など聴覚を刺激する事によって起こる現象と言っても差し支えがないかもしれないね。僕の友人もそうだったんだが……残念だ。君とは生きる時代が違い過ぎてしまった様だ。君の生きている時代はデータの中に音楽を取り入れる事すらできるんだろう？それは、それで素晴らしいとは思うけど僕にはそれぞれが持つ固有の風情ってのがあると思うんだ。記憶を失くしてしまった君はこれから新しい記憶を植え付けていくのだろうけど、是非とも此奴は君の記憶に留めて置いて欲しいね」
　早口で彼は言い放つと、その機械を操作し始めた。黒い円盤状の物をラッパの付いた台に乗せて備え付けられた針を落とす。
　よく見ると円盤の上には何重にも折り重なった溝がありその上を針が優雅に進んでいく。後で聞いたのだが、この円盤状の物はレコー

ド盤というらしくこのラッパが付いているものはレコードプレイヤーというそうだ。因みに、蓄音機という言い方は少し古いらしい。
ブツブツとノイズの様なじりじり音がなったかと思うとそれは唐突に現れた。
大きな音を立て演奏が始まる。セイバーは得意げな表情を浮かべた。オレは今流れている音楽に猛烈に引き込まれた。ドンドンと内側から叩く様に流れてくる音色はオレの身体を心を熱くした。実際、曲の方は全くと言っていい程知らなかったが、レコードプレイヤーから流れ出る広がっていくような曲の流れに感動してしまった。まるで、音という檻に閉じ込められたような感覚だ。オレという存在がそこに内包されるような感覚。
やがて、曲が終わるとオレは思わず立ち上がり、素晴らしい、と盛大な拍手をしていた。
セイバーは口元をつりあげながら言う。
「どうだい?圧縮音楽しか聞いた事がない現代人よ。これが、レコード盤の誇る魅力だよ。鬼気迫るようなサウンド。これに魅了されない筈がない」
気をよくしたセイバーは奥にある更に大きなレコードプレイヤーにレコード盤をセットした。
「僕はこういった類ではマニアでね。こいつならもっといい音が出せますよ」
そういってセイバーはレコードを再生させた。瞬間にオレは更なる感動を覚えた。
先ほどより遥かに大きな音をオレを音楽に引き込ませる。
「凄い……もっと聴いていたい。君のおススメの曲を是非とも聴かせてほしい」
「気に入ってもらえて光栄だよ。では、僕のおススメの曲を幾つか抜粋しよう」
それから、オレはセイバーの選んだ曲の厚みに圧倒され感動を繰り返した。
気づけば二時間ほど時間が経過していた。

これ以上は、キャスターも心配するかもしれない。オレはセイバーに礼をいい、また明日来てもいいか、と尋ねると、もちろん、と答えた。

扉を出る直前で彼はオレの背中にこう言った。

「あぁ、僕の事はキャスターに伏せていてくれないか。戦いに巻き込まれたくはないからね」

「分かったよ」

オレはセイバーにもう一度礼を言い、先ほど聞いた曲を鼻歌交じりで帰路についた。

3

肩口辺りに痛みを覚えて藤丸立香は目を覚ました。お世辞にも寝心地がいいとは言えない硬いベッドの上で上体だけを起こす。
「おはようございます、マスター」
気品のある声で彼女、キャスターは言った。その後ろでセイバー、沖田総司ひょっこりと顔を出して同様に朝の挨拶をした。
藤丸らが一夜を明かしたのは古びたアパートの一室だった。幸いにも空き家で、鍵も開いていたため使わせて貰っていた。
「一つ聞きたいんだけど、沖田はなんでキャスターの協力しているんだ？この横浜が聖杯戦争という形を取っているというなら最後の一人まで戦い抜かなきゃいけない」
藤丸の問いに沖田は少し肩を竦めた。
「私だってここに召喚された当初はそう思いましたよ。でも、ここが異常だなんて直ぐにわかりました。そもそも、呼び出したマスターもいない。自分が独立した個体だなんてことは把握しました。それに――」
沖田が言い淀む。そこから先を言おうかと思案している様子だ。それを、見かねてかキャスターは助け船を出すように口を挟んだ。
「私から説明しましょう。よろしいですね、沖田さん？」
キャスターは沖田に視線を送ると、沖田の方も小さく頷き同意した様子だった。
「昨日も話した通り私達のいるこの特異点では六騎のサーヴァントがいます。マスターが最初に遭遇したバーサーカー。そして、マスターと出会う前。私と沖田さんが合流した直後彼らは現れたのです。その中の一人にはサーヴァントも居ました」
キャスターはもう一度沖田に視線を送る。沖田は俯いたままだった。
「私達は襲撃されたのです。刀を携えた人斬りの集団に」
「……それって？」
藤丸は思わず声をあげた。人斬り集団。それに該当する集団、それ

こそ今まさに目の前にいる彼女が生前在籍していた新撰組の事を指しているのだろう。
藤丸は沖田に視線を移すと彼女は口をゆっくりと開く。その表所は俯いていて彼には窺い知れなかった。
「ええ、かつての私達の同士でしょう。ですが、元同士です。何故なら――」
言いかけて藤丸らは一斉に窓の向こうに視線を奪われた。彼らの意識を奪ったのは、外から聞こえた人々の悲鳴だった。
藤丸は窓際に駆け寄り身を乗り出すようにして外の光景を見た。キャスターと沖田もそれに続く。そして、そこで見たものは彼らの想像の外にあった。
まるで、この世の地獄とも言える光景。無数の集団が街を歩く人間を一方的に虐殺していたのだ。
怒号、悲鳴、それらが藤丸の聴覚を刺激する。
噴出する血液、子供を抱きながら絶命する女、頭を垂れ命乞いをするも無残に切り捨てられる男、それらが藤丸の視覚を抉った。
「なんで、こんな事を――ヒドい」
逆流する液体を、上昇する憤怒の感情を、自身の作った握りこぶしで抑えつける。
「止めなきゃ、こんな事許されるはずがない」
飛び出そうとする藤丸とそれに追随しようとする沖田は既に臨戦態勢になっていた。
「お待ちください、マスター。これは罠です。彼らは私達を炙り出そうとしているのです」
窘めるような口調のキャスターに対し、藤丸は怒鳴るような声を上げて反論した。
「だったら尚更だ。自分達の所為で無関係の人々が苦しめられている。助けに行かない訳にはいかないだろう」
「ええ、私もマスターに賛成です」
藤丸と沖田はキャスターの反論を待たずに部屋を飛び出した。
彼らが現場に辿り着く頃には既に死体が道中に広がり、アスファル

トのキャンパスを赤い鮮血が塗りつぶしていた。
　刀を携えた男達は五人。そして、中央にいる一人はサーヴァントだった。狐の面を被り、段だら模様の着物を羽織った剣士は藤丸らを視界におさめると口元を吊り上げた。
「おいおいカルデアのマスターも起こしかい？昨日はうちの女王様が世話になったな。あぁ、こんなやり方で釣りだしたのは謝るさ。でもよ、こそこそ隠れてるお前らが悪いんだ――――ぜ!!」
　弾かれた花火の様に。刀をもつサーヴァントは藤丸に突貫した。周りの有象無象である浪士たちも彼に続いて抜刀した。
「貴方……貴方は！」
「言うなよ総司！俺は、俺の為にお前を斬る覚悟ぐれぇはあるんだぜ？」
　沖田と刀をもったサーヴァントが拮抗した鍔迫り合いをすると、残りの浪士達は藤丸へと刃を向ける。
「マスター！」
「よそ見をする余裕があっていいなぁ、総司」
　今の藤丸は余りにも無防備だった。
　迫りくる刃に抗う術など持ち合わせていない。思わず両腕で顔を覆う様に竦んでしまう。
　だが、次に藤丸がみたものは浪士達が次々と吹き飛ばされてく光景だった。
「全く、少しは状況を考えてください」
「キャスター！」
　藤丸が振り返った先には、左腕を突き出し魔術の光弾を放ったキャスターの姿があった。
「サーヴァントでないのなら微力な私もやれます。マスターは沖田さんの援護を」
「あぁ、沖田！」
　沖田へ強化の魔術を施す。一時的ではあるものの彼女の瞬発能力が大幅に向上する。
「はぁ」

気合いと共に発せられた彼女の声。
それは、同時に相手サーヴァントの刀を弾きあげるには充分だった。
追い討ちを掛けるように振り払われた一閃を相手は辛うじて避けてみせた。
「あーあ。やめやめ。今日は大人しく撤退するさ。総司、決着は必ずつける」
「待ちなさい、待って、待ってください！
沖田の声は無残な地獄と化したこの場所に響き渡るだけ。
敵対したサーヴァントは直ぐに視認できない場所に消えてしまっていた。
「沖田……」
「すみません、マスター。私は」
俯いた彼女に藤丸は掛ける言葉が見当たらなかった。
それでも聞かねばならない事がある。そんな藤丸の胸中を代弁するかの様にキャスターが口を開いた。
「沖田さん　彼の正体。真名を教えてくれませんか？私達にはその情報が必要です」
「俺からも頼むよ　沖田」
「ええ、何故か面を被っていた様ですが。あの人は彼に間違いありません。かつては私達と共に戦い袂を別った。新撰組八番隊組長。真名を東堂平助」
藤丸にも幾許かの知識は持ち合わせていた。
新撰組。かつて日本の幕末で活動した組織だ。
主に不逞浪士などの取締り等を行なっており、現代でも知名度の高い存在。
その新撰組の二人が特異点とはいえ時代を超えて衝突するのは皮肉だった。
それも沖田の言う通り、東堂平助は新撰組を思想の違いで離脱した伊藤甲子太郎について行き、後に新撰組に暗殺されこの世を去った人物だ。

「沖田、その……」
「関係ありません……また来るのなら切り捨てるまで」
「――ぱい――せ――」
沈黙した空気を払拭するかの様にノイズが走った。
藤丸は聞き覚えのある声に辺りを見渡すがカルデアからの通信ウィンドウは見当たらない。
「マスター、一度アパートに戻りましょう」
キャスターの提案に藤丸は頷き、地獄の様なこの場から後ろめたさを感じかながらも一旦アパートに戻る事を決めた。
＊
「よかった先輩。ここなら映像も届きますね」
ウィンドウ越しに笑顔を浮かべたマシュに藤丸も思わず笑顔で返した。
沖田はウィンドウを不思議そうに眺めクルクルとその周りを回っていた。キャスターはただ佇み藤丸の後ろから見ているだけだった。
「音声と映像は不安定でしたが観測自体は辛うじて出来ていた状態です。今、先輩の側にいるサーヴァントはセイバーの沖田さんに……キャスターですね」
「あぁ、彼女は訳あってまだ真名が明かせないけど俺を助けてくれたんだ。悪いやつなんかじゃないよ」
「そう……ですか。ええと、先ほどまで反応があったアサシンのサーヴァントはいない様ですね。敵対していたのですか？」
「そうなんだ。それに彼の真名も分かっている。新撰組八番隊組長だった東堂平助」
あっ、とマシュは驚いた顔をし、直ぐに申し訳ないという顔をした。
「問題はありません。私は彼がまた来れば斬りふせるだけですから」
「大丈夫だマシュ。沖田も覚悟している。それより今はもっと情報が欲しい。そちらから、何か観測できた事象はない？」
藤丸の問いにマシュは少し困った顔を見せた後に、ありません、とだけ答えた。
それをみたキャスターは少し微笑みを浮かべた。

「沖田さん、マスターも魔術を使って疲れたでしょう。ゆっくりさせてあげましょう」
「え？えぇ、そうですね。では、マスター後ほど」
キャスターは沖田を伴い部屋を出た。藤丸だけが取り残される。
「先輩が最初にレイシフトして出会ったサーヴァントはバーサーカーですね？」
「あぁ、襲われた」
「そしてキャスターさんは真名を明かせないと？」
「それがどうかした？」
「はい。バーサーカーとキャスターの霊基は同じなんです。クラスはこそ違いますが。間違いなくキャスターとバーサーカーは同一人物です」
＊＊＊＊＊
目を覚ますと辺りは真っ暗闇だった。
窓から賑やかな太陽の陽射しを浴びるなどという快適な朝を迎えるという事はなく、オレは落胆した気持ちをため息と共に吐き出した。
何せ一日中眠っていたのだ。
記憶も戻っていないのだから、まだ明るい内に街を探索しようという寝る前の決意は彼方に消え去ってしまった。
ベッドから身を起こす。案外と寝心地がよかった。オレは枕元の灯りをつけ部屋を見渡し安堵した。またもや記憶のない場所にいたらという恐怖心は杞憂だったようだ。
「キャスター」
彼女の名前を呼んだ。しかし、返事はない。
昨夜、帰宅したのはまだ日が昇る前ではあったがキャスターはいたく呆れた様子だったのは覚えている。
一体どこにいっていたの？、誰かにあったの？、など、これでは母親か恋人の様だと苦笑いしたが、キャスターの方はいたく真面目な様だったのでヘソを曲げてしまった。
目が覚めたらいの一番には謝ろうと思ったが肝心の彼女がいない

のでは仕方がない。
時計の針を確認すると午後の九時を指していた。オレは内心でキャスターに謝罪しセイバーのところに向かうことにした。
その為にはやや長い石階段を下らなければならない（セイバーのいるビルの階段を登るよりはいささかましだが）昨夜は気がつかなかったが途中唸り声、地響きというべきか、その様な音が聞こえた。これは、帰宅した時に初めて気がついた。
はた迷惑な住民もいるものだとオレは思った。
セイバーのビルは大体、徒歩で二十分程で着いた。今にして思えば体が歩き方を覚えていてくれて良かったと思っている。でなければオレは未だにあの薄暗い部屋の中に閉じこもっていただろう。
ビルを見上げる。やはりセイバーのいる階には灯りが漏れていた。まるで、オレを迎え入れるかの様な光にすら思えた。
が、それを享受するにはまたこの階段を登らなければならないのはいささか億劫だった。
階段を登りきり扉の前に立った時には既に汗だくになっていた。
扉を数回ノックすると中から、どうぞ、と声がしたので中に入った。
室内は相変わらず雑多であった。部屋の主のセイバーはソファの肘掛に背中を預け両足はだらりと下げてだらしない体勢をしていた。
「こんばんは。ダルそうにしているね」
オレが声をかけてると彼は、あぁ、とこちらを見向きもせずに答えた。
「藤丸くん、退屈だとは思わないか？」
「そうかい？記憶のないオレからすればここに来れば真新しい事ばかりだよ」
「そう。ところで何か思い出したかい？」
「いいや、それにさっき起きたところ」
「へー、そう」
興味ないとでもいいたげな態度だった。
今、セイバーは退屈だと言った。彼と話せば何かしら記憶が戻るきっかけが掴めるやもしれない。何とか、会話を捻り出そうとする

が、話題は中々見つからない。
うーん、と唸り声を上げるオレを時たま横目に眺めては直ぐにセイバーは天井を仰ぎ退屈そうにしている。
何だか悔しくなって彼の興味を引きたくなってきた。何かないかと思案する内に昼間の出来事を思い出した。
「セイバー、今日の昼間の事を話すよ」
「はい、どうぞ」
違和感というか記憶の、いや知識だろうか？何かしらの齟齬を感じながらオレは昼間の出来事をセイバーに話した。
「昼間の事だ。オレは目を覚ますと人の悲鳴が聞こえたんだ。オレは直ぐに窓から外をみた。すると、周り一帯は血の海だった」
「へー」
セイバーのやる気のない変事にオレは少し苛立ちを覚えたが、何とか耐えて話を進めた。
「オレはサーヴァントの沖田を伴ってそこに向かう。すると、敵のサーヴァントアサシンがいた。真名は東堂平助。彼を何とか退ける事に成功した」
「そりゃすごい」
セイバーはわざとらしくいった。あいも変わらずだらしない体勢のままだ。流石に頭にきたのでオレは怒鳴った。
「セイバー、人が話をしているというのにその態度はないんじゃない？」
「君が勝手に話を始めたんじゃない。じゃあ聞くけど君は昼間何をしていた？」
とち狂った事をいう奴だ、とオレは叫びそうになった。一体何を聞いていたのだろか。
オレはわざとらしくもう一度同じ事を言ってやろうと、息を思い切り吐き出した。
「あぁ、何度でもいってやる！オレは昼間に　――――あっ!?」
何て馬鹿な事を言ってしまったんだ。
思わず頭を抱えそうになる。オレはさっきまで寝ていたじゃない

か。
だとすれば今のは記憶だ。今日の出来事ではない。さっきの違和感の正体はこれだったのだ。
これは、自分がレイシフトしてから二日目の記憶に相違ない。
きっと記憶が混濁してしまっているのだろう。
申し訳ない気持ちになりオレはセイバーに詫びた。
「ごめん。でも、何でセイバーはわかったんだい、オレが勘違いしてるって？」
「自分で今起きた、と言ったじゃない。まぁ記憶が戻って良かったんじゃない。生憎と何日前の出来事かは僕にはわからないけど」
「じゃあ、新聞とかテレビはない？あんなに人が殺されたんだ話題にはなっているだろう？」
「いや、残念だかそういった事件を耳に挟んだ記憶はないな。そもそも、その記憶にしたってこの特異点の記憶ではないかも知れないよ。場所は覚えてる？何でもいい、目立つ看板や特徴的な建物だ。君の該当する記憶とここにある建物が一致すれば、それはここで起きた事件なんだろうね」
セイバーの意見を肯定する様にオレは思案する。あの時その様な建造物はあっただろうか？しかし、それらの記憶は復元される事はなかった。抽象的な俯瞰での曖昧な映像。
まるで、断片的なフィルムを流されてる気分になった。
「思い出せないな」
「そうか。なら記憶が戻るまで待つしかないだろう」
「ところで、昨日みたいに音楽をかけてくれない？」
ここに来る理由の半分はこの為といっても過言ではない。オレはすっかりレコードの出す音色の質感に魅了されてしまったのだ。
だが、セイバーはそんな浮かれ気分のオレとは対照的に退屈そうな態度を変える事はなかった。
「何でも好きな曲をかければいいよ」
「じゃあ、そうするよ」
レコードプレイヤーの操作は昨日見て覚えている。針を落とす感

覚はオレの背筋をぞわぞわとくすぐるものがあった。
流れ出る心地よい音楽に身を委ねてオレはソファの上で目を瞑った。
セイバーは、あぁー、とか、違う、など独り言を並べている。何とも、珍妙だ。
シャドウサーヴァントとはいえ、彼とて英雄、もしくは英雄に近い人物だったのであろう。
そういえばオレは彼について何も知らない。出会って二日目だから当然なのだがもう少し彼について尋ねてみようと思った。彼といると何故か落ち着く気分になれたのは、目が覚めてからまともに話したのが彼ぐらいだからだろう。キャスターは例外だ。一方的に、話を畳み掛けられただけだし。
「セイバー」
「――なに？」
彼は不機嫌そうにいった。ボサボサに乱れた髪を掻き毟りながら上体を起こして、こちらを睨みつける。先ほどよりは話しやすくなりはした気がした。
「セイバーは生前何をしていたの？」
「それを話した所で君の記憶が戻るわけではないでしょう？」
「それは、そうだけど。何処か別の場所で出会っているかもしれない」
「そう？絶対にないと思うけど」
「いいじゃない。話してくれよ」
「――まぁ、いいよ。僕はそうだね。ここに住んでいる時は占い師。昨日も話したけど占星学ってのを教えてたりしたね。後は、探偵とか」
「探偵？」
どこか心躍らせるフレーズだった。オレは続けてセイバーに問う。
「じゃあ、殺人事件とかそういうのを解決したっていうの？」
「幾つかね。謎を解くという行為は実に面白いよ。純粋に頭脳労働党言う奴は退屈しなくてすむ」
「凄い、まるでシャーロック・ホームズみたいだ」

オレが言うと彼は眉間に皺を寄せて、見るからに不機嫌になった。
何かマズい事でも言ったのかと危惧すると彼は苛立った口調で言う。
「それは違うよ藤丸君。僕が彼ににているんじゃない。彼が、僕に似てしまったのだ。大体、僕の事を東洋のシャーロック・ホームズだなんて持て囃した連中もいるけど不愉快だったね」
「嫌いなのシャーロック・ホームズ？」
「そもそも、薬や煙草に依存している人間を君は好きになるのか？この物語が描かれた時代は合法だなんて筋の違う話をする人もいるがね、そういう問題ではない。僕らの論理感は今、現代にある。なぜ、思考レベルをその時代背景に合わせる必要があるのだ？その時代は合法だから問題はないだと？薬は薬だろう？良い事の筈がない。君だって幼少の頃、悪い事をしなかった？更に、言えばそういった事に憧れもしたんじゃない？何故か、普段は抑制された感情を発散したいという欲求の表れだよ。だがそれは我々は理性を持って対処しなければならない。だがら、人は空想や架空の存在に惹かれるのだろうね。いわば物語の登場人物は君達のストレスのはけ口だ」
大分、話が逸れた気がするが、オレは敢えて指摘する事はしなかった。
思わず立ち上がり熱弁を振るうセイバーにこんな事を尋ねてみた。
自分の記憶が戻らない苛立ちと淡い期待も込めて。
「じゃあ、セイバーに依頼するよ。オレの記憶を取り戻す。その手伝いを」
「へぇ、手伝いだけでいいのかい？僕は、君の全てを先に見つけてしまうかもしれないぜ」
「構わないよ。じゃあ、依頼を受けてくれるって事でいいかな」
「あぁ」
「それなら今日は帰るよ。明日は昼間に起きて街を探索したいからね」
「そう。何かわかったらまた教えてくれ。それじゃ」
オレはセイバーに見送られながら部屋を出た。

帰り際、見上げたビルの灯りは未だに灯っており、慌ただしく影が蠢いていた。

4

「返して……返して。私からまたあの人を奪うの？なんで？なんで？返して……私はただあの人といたかっただけ。あの人の国を守りたかっただけ……返して」

女は泣いていた。

一人でないていた。一人でいるにはただ広い室内で、彼女は玉座に座り泣いている。

傍に棺を抱きしめないている。

薄暗い室内。怒りに任せた金切声も、床に何度も足を打ち付ける音も虚しく反響するだけだった。

「おいおい、荒れてんなぁ女王様」

「アサシン、何か様かしら？ないなら……出ていって……出て行け！」

飄々とした声にバーサーカーは苛立った。そんな彼女の意思を知ってか知らずか、アサシンは気にも止めずに彼女に歩を進める。

「こんな辛気臭い所に閉じこもってちゃぁ、何も変わらないぜ？取り返しにいかなくちゃぁな」

「カルデアから来たマスター共の居場所が分かっているの？」

「あぁ、大体は。昨日ちょっくら暴れてきたからな」

「教えなさい」

バーサーカーはアサシンに掴みかかる勢いで詰め寄る。流石のアサシンもその勢いに気圧されたのか数歩後退りした。

「教えるのはかまわねぇよ？ただ、アンタが探しているものってのは案外近くにいるんじゃねぇか？」

「どういう意味？」

「言葉通りの意味さ。まぁ、キャスターのアンタがアンタのモノを奪った事実には変わりはないんだ。好きにしなよ」

「貴方一体誰の味方なの？」

「何言ってんだ？俺は俺の味方さ。俺は俺の信じる道しか信じないからよ」

轟音と共に弾かれたバーサーカーの背中をアサシンは不敵に笑い

見送るだけだった。

＊

晴天だった。だからと言って気分が晴れる事はない。藤丸立香は青く広大な空を見上げ思案した。今回の特異点は余りにもゆったりとしていたからだ。今までの経験上は戦いが表面化しており、なし崩しに戦地に放り出されていた様な物だ。だからこそ今回の特異点は異質なのだ。昨日の事件やバーサーカーの襲撃以外には表立っての怪異など起きてはいない。

ここで暮らす人々は平穏そのものを謳歌しているようにすら思えた。

寧ろ、ここの平穏を乱し厄災を運んできたのは自分の方だと錯覚すら覚えてしまう程に。

藤丸は首を振り、その様な世迷言は即座に切り捨てる。

「マシュ、聞こえる？」

「はい、なんでしょう先輩？」

「キャスターに今から直接聞く」

「――――え？」

ウィンドウ越しのマシュの表情が硬直した。

「別に聞いて困る事でもないだろ？真名を隠す必要性がないじゃないか」

藤丸のいう事も一理はある。キャスターの真名を知ればバーサーカーの真名も把握する事が出来る。現状、カルデア側に味方しているサーヴァントは沖田とキャスターのみ。

敵のアサシンは沖田が抑え込めるとしても、バーサーカーは難しい。それに加え二騎で攻め込まれた場合対処の仕様がなかった。その為にも敵の真名を知り弱点を突くことが出来るのであるならばそれが最善の策であろう事はマシュも理解している筈だった。

「キャスター」

藤丸が彼女の名を呼ぶ。すると、キャスターは律儀に扉から入ってきて、何か？、と言った。

「君の真名を教えて欲しい。君がバーサーカーと同一の存在だっての

は調べがついてる。これからの戦いでバーサーカーは脅威になる。君の気持ちをわかるけど協力して欲しい」
「えぇ、わかりました。ただ、自分の恥部を晒すのは些か気が引けます。真名を伏せていたのはその為です」
キャスターは俯く。藤丸も居心地が悪くなり視線を外す。
「マスター!敵性反応」
気まずい空気を斬り払う様にマシュの声が飛んだ。藤丸が窓の外を見ると怒号をあげて建物の屋根を跳ね跳びながらこちらへと直進してくるのが見えた。
すぐさまに藤丸とキャスターは建物の外へと退避し、闇雲に狭い路地裏に逃げ込む。
「くそっ!マシュ何処かに隠れられる場所は?」
「ありません。バーサーカーに完全に捉えられています」
「戦闘するにしてもせめて開けた場所に。ここじゃ被害がでるだけだ」
「マスター、この先に大きな空地があります。そこなら」
「わかった!キャスター行ける?」
「ええ、何とか」
マシュの指示に従い藤丸らは広大な空き地にへと辿り着いた。
ここでなら被害は最小限に抑え込む事が出来るだろう。だが、逆に言ってしまえば彼らの逃げ場も無いに等しい。
「袋の鼠ね」
轟音と共に猛々しく砂埃が舞い上がる。
その奥でバーサーカーの眼光が鋭く光った。
「キャスター」
サーヴァントの名を藤丸は叫んだ。臨戦態勢をとるようにと言う意味合いを込めて。
キャスターもその意を汲み取り、現界させた杖を構える。
「来なさい、バーサーカー。いいえ、愛などという虚構に溺れた私。貴女の愛した最愛の人はもう居ないのです。目を覚ましなさい、フアナ」

キャスターは力強く言葉を紡ぎ、自らのそして相対する敵の真名を名乗った。
「ファナ……女王ファナ。成る程、バーサーカーとしての召喚もありえます」
マシュの深刻な声に藤丸はファナについて尋ねた。
「カスティーリャ女王、異名ですが狂女ファナとも呼ばれています。ですが疑問ですね、彼女と夫であるフィリップ公の仲は良くなかったと言われています。それにフィリップ公の死には毒殺説もありますから」
マシュは独り言の様に呟く。
「えぇ、その通りです。あの私は色々とおかしい。フィリップ毒殺の件は一旦置いといて。バーサーカーは恐らくですが後世に語り継がれる過程で歪んでしまった私」
「あの姿は貴女ではないと？」
「そうよ、マシュさん。だって私、フィリップの事なんて一度も愛した事ありませんもの」
「え？」
「マシュ！キャスター！話はいいから！援護して！」
藤丸が叫ぶ。
彼は辛うじてバーサーカーの攻撃を回避したが、それにより生じた衝撃と飛散する砂利に吹き飛ばされ尻餅をついた。
「さぁ返してもらうわ！私！貴女が奪うのならば私も奪うの！貴女から貴女から！」
バーサーカーは自らの正面にその巨大な棺を地表に突き立てる。
「カルデアのマスター。貴方がフィリップの変わりになってくださる？でなきゃ……でなきゃ私は狂ってしまうから！」
「バーサーカーの魔力が高まっています！先輩来ます！」
「宝具!?マスター援護します！逃げて！」
キャスターが杖から光弾を複数射出するがバーサーカーは怯まない。
ならばとキャスターも更に光弾を放つがバーサーカーは受けた傷

を気にもとめずその姿勢を維持したまま咆哮した。
「さぁ、フィリップ。大人しく棺に帰りなさい」
バーサーカーの棺が開き中から無数の鎖が弾けた。
それらは藤丸の体に纏わり付き彼の四肢の自由を奪う。
「おかえりなさい。私の夫。――――我、女王(ヨ・ラ・レイナ)」
絡まった鎖が藤丸の体を引きずり棺へと誘う。なす術のない藤丸はただ自身の体が引きずられるのを見ている事しか出来なかった。
その棺の中は真っ黒な暗闇が広がっている。藤丸は、それをまるでブラックホールの様だと考えた。
深淵。只々、深い闇がそこにある。
あの様な場所に取り込まれれば二度と戻る事など不可能だという事を彼でも容易に理解する事が出来た。
「先輩!」
「マスター!」
マシュの悲鳴にも似た声。キャスターの声と共に発せられた光弾。
いずれも藤丸の目にも耳にも届かない。
今の彼は傀儡も当然の状態だった。全身は脱力し意識は薄れていく。まるで鎖という糸で縛られたマリオネットの様に。役目を終え退場を待つ人形だった。
「さぁ、早く。はやく速く。私の元においでなさい」
藤丸を助ける手段はなかった。マシュはモニター越しにそれを見つめる事しか出来ず。
キャスターの如何なる攻撃も通用しない。
打つ手がなかった。そう、彼女達では打つ手がないのだ。
「――――全く、私も忘れてもらっては困りますよ」
声がする。女の声だった。それは音を忍ばせ、気配を消しバーサーカーの背後に接敵していた。刀を構え滑るようにそれを突き放つ。
「な――――に?」
バーサーカーは気づいたのはそれが振るわれた後だった。
それは、遅すぎる。それでは遅すぎる。
すでに、彼女の必殺の剣は放たれている。

「――無明三段突き」
放たれた神速の刃は三つ。その全てが『同時に放たれた』という現象をもった必殺剣。
不意打ちで放たれれば回避など到底不可能。
「貴女……セイバーね。私の邪魔を――」
「貴女はアサシン、藤堂さんの仲間ですね。あの人はいまどこに居ますか？」
沖田は彼女の体に刺した刀を引き抜き、膝を折ったバーサーカーを見下すように問うた。
「その質問に意味はあるのですか？時期に会えるのでは？」
バーサーカーは虚ろな目で言った。
「一体何を？」
一方で藤丸の側にキャスターが駆け寄り介抱した。
「大丈夫ですか？」
「何とかね」
藤丸は愛想で笑顔を見せる。バーサーカーの宝具によって負った傷は、鎖に拘束された際に締め付けられて出来た痣くらいなものだった。
対サーヴァントに放った威力で締め上げられれば藤丸の体はたちまち引き千切られてしまっていただろう。
「先輩！」
「大丈夫だよ、マ――」
藤丸の言葉は痛覚の刺激によって停止した。自身でも起きた事が認識出来ぬ程の瞬間だった。
翳した右手は赤い鮮血をまき散らした。
「ぐぅ」
痛みが神経を駆け巡る。藤丸は斬りつけられた右腕を抑えて倒れ込んだ。
「おいおい、腕をもう一本増やしてやるつもりでこっちはやったんだがなぁ。お前、咄嗟に避けたろ？いいね、流石はカルデアのマスターだ」

伏せる藤丸の目の前には刀を鮮血で塗らし、相変らず狐の面を付けたアサシンが笑っていた。
「マスター!・貴様」
キャスターはアサシンへとその杖を突きつけ光弾を放とうとした。
それよりも、速く。何かが駆け抜けた。
次の瞬間に響くのは歪な金属音。殺意を纏った刃と刃が音を奏でた。
「藤堂さん!・貴方は!・」
「そう怖い顔するなよ総司。折角の顔が台無しだぜ」
「五月蝿いですよ」
沖田の刀が上段から一閃される。アサシンは辛うじて直撃こそ避けるも面は割れその素顔が晒された。
「あぁ、これで顔がよく見えるぜ、総司ぃ」
「藤堂さん」
鋭い眼光を沖田に向けて放った。
意識こそ失わなかった藤丸は直ぐに自身の傷の治癒を行う。自身に傷を負わせたサーヴァントに目をやると沖田と共に激しい剣戟を繰り返していた。
「バーサーカー」
藤丸は名を叫んだサーヴァントに視線をやる。彼女とて沖田の三段突きをまともに受けたのだ。並大抵の手傷ではない筈だ。
だが、藤丸はバーサーカーを見て戦慄した。
彼女は未だに立っている。雄たけびをあげ藤丸を睨みつけた。
「――また迎えに来るわ」
「何!?」
直後にバーサーカーは跳躍した。だが、深手の傷を負った今の彼女に猛々しい雰囲気を感じられなかった。
「キャスター追える?・でも、深追いはしないで」
「……ですが、それではマスターは?」
「大丈夫。それより今はバーサーカーを」
「分かりました」

この場を去ったバーサーカーの追ってキャスターも走り出した。
「よろしいんですか、先輩？」
「大丈夫、キャスターも無理はしないと思うから」
藤丸はマシュとの通信を切ると、未だに斬り合いを続ける沖田とアサシンに視線を向けた。
＊
「ふぅ、心配です」
マシュは藤丸との通信を切るとモニターの前でため息をついた。
自身が特異点に赴き隣にいないという責任感と焦りが、見えない何かとなって彼女の肩に重くのしかかった。
背筋を伸ばし伸びをするが、彼女の中のわだかまりは消えないままだ。
「どうだいミス・キリエライト。マスターの調子は」
気づけば彼女の背後にはパイプを咥えたホームズが立っていた。
「心配です。でも、何か違和感というか見落としている部分があると思うのですが」
「なるほど。だが、それは些細な問題だ。それに気がついた所で時計の針は加速するだけに過ぎないからね。最たる難題は戦力の低さだろうね。まともに戦えるのはセイバーだけだ」
「そうですね、キャスターさんはまともに戦える様ではありませんし」
ホームズは一度煙を吐き出して答える。
「あぁ。だが、現状は最善手だと思うね。彼女を速い段階で敵に回すべきではなかったと思うよ」
「――何を言っているのですか？」
「何を驚く？君だって気づいているんだろう？その違和感の正体に今は気が付かなくて正解だったという事さ」
マシュは肩を竦めた。この名探偵には既に事件の全貌が見えているのだろう。
だとしても、その解を言わないという事は彼自身がまだ確信を得ていないのか。
それとも、自身を揶揄っているのだろうか。

いずれにしてもそれはマシュが今考える事柄ではない。
「それはそうとミスター・ホームズ」
「何だい？」
「ここは禁煙です。控えてください」
「……あぁ、これはすまなかったね」

5

男は室内を忙しなく歩き回っていた。机の周りをグルグルと回ったり、部屋の端から端を行ったり来たりしていた。

「あぁ、そういう事か。全く、聖杯とやらは僕にさっさと知識を与えていればいいモノを。僕がシャドウサーヴァントだからか？いいや、違う。これは、違う。僕の責任だ。僕にも意地があった。自分の頭だけで考えていた。考慮しなければならないんだ。現実を受け止めなければならない。これは、特異点なんだと。なら答えは分かっている。とても簡単な事だったんだ。この事件は」

男は息を一つ吐きだしソファに腰をおとした。

ぼう、と窓の外を眺める。本来ならば今すぐにでも依頼人の元へ行き事件の全貌を明かしたいところではあった。だが、無暗に外に出ようものならたちまちサーヴァントにやられてしまう。しかし、それ以前に彼は依頼人の住所を知らないのである。

だが、検討はついている。そして、友人が時期に顔を見せる事も。

彼には分かっていた。

＊

目が覚めた。瞼をこすり目の前に出てきた光景にオレは少し驚いた。

思わず飛び起き窓の外をみると外が明るい。

今まで夜にしか目覚めなかったのに今日は頗る調子がいい。だが、同時にさっきまで見ていた夢を思い出した。嫌な夢だった。

いや、もしかしたら夢じゃないかもしれない。これはきっと記憶なのだろう。

鮮明に映し出された映像を俯瞰でずっと眺めていた。

現実めいたそれはきっとこの特異点での記憶に間違いないと思い、オレはセイバーの元へと急いだ。

まだ明るいせいか外を歩く人々は多い。道行く人を間近で眺めた。

何故だが自分の気が高揚しているのがわかる。気分が浮かれているのだ。

思わず走り出す。素晴らしい。素晴らしい。
何だか生きている心地になった。
「？」
いや、何故その様な感覚に陥るのだろうか？オレは自分の抱いた感情が理解できずにいた。
だが、それはきっと杞憂だ。今は速く彼の元に行ってみよう。
ビルの階段を駆け上る。馴れたものでスムーズに上がる事が出来た。
相変らず息は上がってはいるが。意味を成していない扉を開ける。
「セイバー」
オレが呼ぶと彼はこちらを振り向き言った。
「あぁ藤丸くん丁度いいタイミングだ」
「なにが？それよりオレも思い出した。オレはどうやらここでの記憶を夢で視るんだよ」
「……へー。そうか、そうだな。僕の話は、君の話の後でいい。続けて。あと話も長くなる。キッチンから紅茶を取ってきてくれ」
「え？あ、あぁ」
何となく承諾してしまった為にオレは言われた通りにカップを二つとりテーブルに置く。
カップに紅茶を注ぐと香りが鼻を刺激した。だが、そんなものではオレの気分は晴れない。
何故、客人である自分がこんな事をしなければならないのだろうと。
オレはカップに入った紅茶を一口飲み話を始めようと思った。
「じゃ、じゃあいいか？オレはさっき言った通りここで起きた事を夢で視る。間違いない確信した。ここで起きたオレの記憶だ。そうなると今、沖田が居ないのは気になる」
「ちょっといい？その夢で視る人物たちの顔をハッキリと記憶できてる？」
「いいや、でもオレの顔とキャスターの顔は覚えてるよ。他のサーヴァントは何かよく分からないな」

「そう、続けて」
「あぁ、でこれは三日目の出来事だ。オレはバーサーカーと対峙した。沖田が助けてくれたけど、そこにアサシンが現れてオレの腕を斬りつけた」
「それで？」
「
　そこからはまだ見れてない。目が覚めたから」
「そう」
「セイバーはどう思う？」
　オレが尋ねると彼は少し真剣な顔つきになった。
「藤丸くん、君は僕に記憶を取り戻す手伝いを依頼したね？」
「え？そうだけど」
「ならば、真実が何であれと受け止める覚悟はあるかい？」
「どういう意味？」
　オレにはセイバーの言っている意味が分からなかった。
　彼の言う真実が一体何を指しているのか全く理解できなかった。
「僕は憶測はあまり話したくない。だが、判りきっている事だけは話そう」
「うん」
「まず、キャスターだが彼女はこの特異点を何と言った？」
　何をいきなり聞き出すんだ。オレはセイバーの質問の意図が分からなかった。
　記憶を辿りキャスターの言葉を思い出す。
「ええと、この特異点は聖杯戦争が起きてて勝者には聖杯が与えられる。だから、今は聖杯がない。だったかな」
「あぁ、そうだ。君が僕の所に来て話してくれた事だ。じゃあ、聞くけど特異点はどのようにして起きる？」
「え？」
「逆転しているんだよ。聖杯によって歪んだ事象というべきか。聖杯があって初めて特異点生まれる。勿論、要因は聖杯だけではないけどね」

「じゃあ、キャスターの言っている事は間違ってるって事？」
「そもそも、聖杯がないという前提がおかしい。更に問題なのが彼女が何故そんな事を言ったのかだ」
　セイバーの言葉にオレは何も言わずに俯いた。
「藤丸くん考えろ。何故、君が騙されなければいけないのか？なんだと思う？」
「だ、騙すってなんだよ！」
「――わからないかい？君は騙されている。いや、違う。違うな。君だ。そう、君が核の
　筈。君がこの世界で中心の筈なんだ。そう、そうだ。なら君は――」
　セイバーの目が怖かった。オレを真っ直ぐに見据えるその視線が。
　彼の発する次の言葉が恐ろしかった。まるで、死の宣告を受けている気分だった。
「――君は」
　ヤメロ。
　ヤメロ、ヤメロ。ヤメロヤメロヤメロ。
　キキタクナイ。オモイダシタクナイ。
　シリタクナイ。オレハ。
「違う！」
「なに？」
「違う。オレは藤丸立香だ。カルデアのマスターだ」
「藤丸くん、現実を見ろ」
　セイバーの声が冷たかった。
「セイバー。君の言いたい事が分かったぞ。オレの事を否定するんだな。オレを、藤丸立香のオレを」
　自分でも恐ろしいくらいに怯えている事が分かった。知ってはいけない。
　これ以上は理解してはいけない。自分の中の何かが警鐘を鳴らし続けた。
「そう。なら気づかせてあげようか？」

「馬鹿を言うな！何を」
「腕を見たまえ。君の腕の一体どこに傷がある？」
「――――は？」
思わずオレは自分の腕を見た。其処には在る筈のものが何一つなかった。
頭がパンクした。頭が状況を理解しない。拒み続ける。
この現実を真実を拒み続ける。
「う……あ、ああ」
声にならない声が漏れた。激しい嘔吐感。不快感がオレを覆い尽くす。
傷がない。それどころかそれは、人の腕というには余りにもか細く黒ずんでいた。
肉は削げ落ち骨格がハッキリと視認できた。
まるで、人のそれではない。これが、オレの腕だというのか。
間違いだ。これは何かの間違いだ。
「あ、あああ。あぁぁぁ」
「藤丸くん」
セイバーの差し出した手をオレは払いのける。
「黙れ！黙ってくれ！オレは、俺だれだ」
「君は――――」
「ウルサイ。くそ、クソクソクソクソ。あああぁ」
セイバーを振り切りオレは部屋を抜けて、階段を駆け下りた。
後ろからセイバーが追ってくる様子はない。
オレは叫びながら街を走った。人の目もくれず走った。
数人とぶつかったが誰もオレを咎める事はなかった。
闇雲に当てもなく走った。走ったつもりだった。
だが、気づけば見覚えのある通りに出ていた。
そう家の通りだ。そこで、オレは初めて気がついた。
見上げる。その建物を見上げる。それは、紛れもなく城だった。
だが、それは些細な事だ。こんな街中に城がある事実よりも。
この城で俺自身が毎日寝起きしていた事が問題なのだ。

何故、気が付かなかった。何故、疑問に思わない。
オカシイ、可笑しいだろ。こんな事は。
「あぁ！」
女の声がした。何処からかは分からない。只、女の声がした。
直後にそれは頭上から降ってきた。オレは思わず目を覆った。
何かが地面とぶつかる鈍い音が響いた。恐る恐るそれを確認する。
周りを歩く通行人は見向きもしない。それもそうだろう。
何せ彼女はサーヴァントなのだから。
「キャスター？」
オレは彼女を知っている。
だが、今のキャスターはオレが知っている姿とはかけ離れていた。
着こなしていたドレスは引き裂かれ、赤い鮮血を流していた。
「ううう」
意識が朦朧としているのか彼女は小さい呻き声を漏らした。
オレは彼女を何とか抱え上げて城内に入った。
未だに彼女は目を覚まさない。しかし、一度に色々と起こり過ぎだ。
頭の整理が追いつかない。
恐る恐るもう一度、自身の腕を見てみるが先ほどと変わりはなく不気味な腕だった。
「――あぁ、フィリップ」
腕の中で呻く彼女の瞳がうっすらと開けた。
何故だろう。何故、こんなにも彼女に引き込まれてしまうのだろう。
初めて彼女を見た時もそうだった。体の内が彼女を求めているかのように。
不思議な感覚に陥っている。
か細い血塗られた腕が震えながらオレの頬を撫でた。
何故だろう？オレの頭は依然として混乱に陥っているのに、自然と彼女の腕を握りしめていた。
「あぁ、よかった。――フィリップ」

満足そうに彼女は微笑んだ。なんで。なんで、こんなにも愛おしいのだろう。
「キャスター……」
彼女の小さく開けた瞳。その奥には一体何が映っているのだろうか？
少なくともオレはフィリップではない。
オレは――――。
「さぁ、戻ってき――――」
もう一度彼女が微笑んだ。オレはその表情を知っている気がした。
何かが湧き上がる感覚。
だが、それは一瞬で泡と消えた。
「な、んだ？」
視界が赤く塗りつぶされる。何が起きたのか理解が進まない。
なんで？なんで？なんで？
なんでこんなにも目の前が真っ赤に染まっているのだろうか？
「あ、あああぁ」
何とか絞り出した声は、音にならない。
目の前の彼女だった者は、赤い赤い血を噴出させた。
心臓に突き刺さった何かが、確実に彼女の息を止めたのだ。
「騙されないでください、マスター。その女はバーサーカーです」
冷たい声がした。オレの腕の中で消えていく彼女とは別の彼女が目の前にいた。
彼女は突き刺した杖を引き抜きオレと消えていく女を見ていった。
「大丈夫ですか？」
「キャスター？なんで、二人いる？」
「それは、偽物です。いや、そうですね。本物には違いないのでしょう。ですが、そいつは偽物です。本当の私は私なのです」
「え？あぁ、あああ」
オレはキャスターの言った言葉に茫然と頷いた。
では、今オレの腕の中で消えていったサーヴァントはバーサーカーなのだろう。

駄目だ。駄目だ。駄目だ。
「何が、何が起きているんだ……」
「マスター安心してください。私が、説明します。だから、だからどうか気を確かに持ってください。私は貴方の味方です」
微笑んだ彼女はオレを抱きしめる。
だが、オレはそれを心地よいとは感じなかった。いや、無意識の内に体がそれを拒んでいた。
キャスターを突き飛ばして、オレは頭が真っ白になった。
自分が何者か分からなかった。
いや、違う。オレの中の何かが拒んだのだ。だが、それが一体何なのか。
オレには何も分からない。
「分からない。オレは……。オレは何者なんだ。アンタは誰だ。本物のオレとアンタはどっちなんだぁああ」
叫んだ。がむしゃらに。出鱈目に叫ぶ。
そうでしか。そうするしか。
オレには出来なかった。

6

彼女を初めて見た時、可憐だと思った。
訪れた道場に一人の少女が居た。
彼女は間違いなく天才だった。剣の腕で彼女に敵う者などいなかった。
彼女の挙動には目を奪われる。本物の天才だった。
だが、俺はそれを妬ましかったのか。
それは、彼女が女だったからか。
いや、違う。嘆かわしいと感じた。
何故、彼女なのだと。
彼女にこれほどの才をなぜ神は与えたのだろうか。
これほどまでの悲痛な人生を何故歩ませたのだろうか。
俺は悔しかった。彼女を上回る力があれば、彼女を闘争に巻き込まずに済んだのだ。
ならば、この世が間違っているのだ。
彼女を闘争に巻き込んだこの国の在り方が間違っているのだ。
ならば、それは打つべき敵だ。
この日に平穏が訪れれば彼女は剣を握る必要もない。
ならば、俺はここにはいるべきではない。
幕府の言いなりになったこの新選組では世を変える事は出来ない。
俺は、彼女が。
ただ、可憐な彼女が笑っていればそれでよかった。
だから、俺は願いを。
志を違えたりは決してしない。
＊
「総司ぃぃぃ」
アサシンの振り下ろした一刀を沖田は澄ました顔で受け流した。
「はっ」
そのまま態勢を崩したアサシンへ刀を横薙ぎに振るった。
僅かではあるが掠めた剣先がアサシンの肩口を赤く濡らす。

「総司……お前は何故戦う？ここにはもうお前のいた場所はねぇ。なのに、何故刀を振るう？何故だ！お前はなぜ死んでなお、英霊という座に居座って剣を取る!?答えろ……答えろ！総司ぃ！」
「戦う理由ですか？改めて問われると可笑しな話ですね。私は、もう一度。
もう一度みんなと、今度こそ最期まで戦い抜きたいだけです」
「……そんな事。そんなもん、オカシイに決まってるだろうが！」
「自分でも馬鹿げていると思ってますよ」
「だったら――」
「でも、私はこれしか知りませんから」
一度、ほんの少し沖田は寂しそうな顔を浮かべた。
少なくともアサシンには彼女の顔がその様に見えた。
それは、とても悲しい事実。
「死ぬために、また死ぬおもいをして戦うとはふざけた事を言うな。何故、そこまで拘る。
お前はもう戦わなくていい。もっと、全うな願いを持て。お前には。
お前にはもっと全うな生き方だってあった筈だろう！」
アサシンは叫んだ。それは、彼の心の底からの叫び。
心の底からの願い。沖田総司という一人の女性に対する叫びだった。
「言いましたよね藤堂さん。私はそれしか知らないし、新選組が私の居場所だったんですから。――もう、話はいいでしょう？引いてくれないのなら藤堂さん、貴方をここで斬ります」
「――あぁ、そうかい。やってみな総司。だが、俺が終わらせてやる。そんな戯言を。
そんなモノを真実としたお前の虚構を、俺が斬り伏せてやる」
二人は同時に得物を振るった。もう何度目となるか分からない程に打ち合い続けた。
殺気と殺気が空間を彩る。沖田の目は正に戦士、剣客、人斬りの目だった。

その眼差し、眼光を向けられたアサシンは内心ため息をついた。
彼女の在り方は間違っていると。
こんなにも美しい女が何故人斬りなどしているのだろうか。
それは、やはり間違っている。生前抱いた感情は今も変わりはない。
だから、こうして彼女の前に自身は立っているというのに。
結局、彼女に向けて刀を振るう事でしか分かり敢え無い。
とんだ矛盾を孕んでいるのは己自身だというのに。
だが、だから。
いや、結局、アサシン藤堂平助も沖田総司となんら変わりはないのだ。
こうでしか、こうする事でしか。このやり方でしか知らない。
アサシンが沖田に望んだのは、女性らしく生きる事だった。
血生臭い人斬りなど、可憐な彼女には似合わない。
だが、藤堂自身はどうだったのだろうか。彼自身もその在り方まで示す事など出来はしない。
結局、彼らは人斬り集団。
こうする事でしか、自分の生き様を貫き通せない大馬鹿者なのだ。
「藤堂さん、何を迷っているんですか!?」
沖田の声が飛んだ。アサシンは思わず彼女を見た。
笑っていた。沖田総司は笑っているのだ。
何故？何故？
アサシンにはその意味が分からなかった。
裏切り者の自分を斬れるという喜びか？だが、そんな気は一切も感じられない。
なら、一体彼女は何故笑っているのだろうか？
アサシンは刀を振るいながら思考する。だが、答えは依然と浮かばなかった。
「ふっ」
だが、何故だろう。アサシンは自身の感情に疑念を抱く。
何故、俺は今笑っているのだろうと。

戦わせたくない女に刀を振るい、殺し合いをしている最中に何故、俺は笑ったのだろうと。
「藤堂さん、やっぱり貴方と打ち合うのは楽しいです。ですが、今の私達は敵同士。斬り伏せねばいけない相手。すみません。終わらせます」
「――何いってやがる。お前こそ俺が生前勝てなかったからと言って、油断してっと首が飛ぶぜ！」
アサシンの振るった刀を避け沖田は後方へと飛び退き距離を取った。
瞬間、アサシンは彼女が何をするかすぐさまに理解した。
「くるかよ」
唾をのみ込み喉が鳴った。アサシンは刀を中段に構え沖田を睨みつけた。
「――一歩音越え」
沖田が駆ける。それは、彼女の縮地が成せる技巧だった。
瞬時、地面を掛け敵へと接敵する。
無論、アサシンはそんな事を重々理解していた。
「二歩無間」
アサシンは動かない。彼女の剣技は回避不能の必殺剣。
ならば、それよりも速く沖田を切り捨てるほかない。
彼女が踏み出した三歩目と同時に踏み出す。そう考えていた。
「三歩絶刀！」
「――あ」
踏み出された三歩目。しかし、アサシンは動けなかった。
ただ、乾いた声を漏らしただけだった。
彼は気づいてしまった。いや、思い出してしまった。
自身の胸の内に抱いていた感情を。瞬間、彼の足は止まっていた。
迫る沖田の刃。だが、アサシンは動かない。
理由は簡単だった。見とれてしまった。
沖田総司という剣士に見とれてしまっていたのである。
「――あぁ、そうだ。思い出した。お前はそうだった。忘れてし

まっていた。いや、言い訳にしていたのかもしれない。本来の目的を見失った新選組を去る理由に。俺は総司を使っていただけだった」
「無明三段突き！」
沖田の刃がアサシンの胸元を抉った。溢れる鮮血。
返された血を浴びながら沖田は呟く様にいった。
「――何故、避けなかったのですか？」
「――避けれるなら避けていたさ。でも、無理だろ？お前のそれを避けるのは」
「藤堂さん」
「忘れていたよ、総司」
「――何をですか？」
「お前は――いや、やっぱいいわ。直接言うのは照れくせぇ」
アサシンは胸元に突き刺さった刀を自ら引き抜くと、力の入らない足で尻もちをつく形になった。
「――いえる訳ねぇよ。あれを放つときのお前が、一番輝いていたなんて。一番、可憐だったなんて」
沖田に聞きとられぬようそう呟いた。
「なぁ、総司」
アサシンは彼女を見上げていった。
沖田はただ、彼の言う言葉を黙って聞いていた。
「お前の最期まで新選組として、仲間と共に戦いたいっていう願い。その中に、俺は入ってんのか？」
「――当たり前じゃないですか。勿論、入ってるに決まっています」
「そうか、そうか。なら、なら俺は満足だ――」
「藤……堂さん」
アサシン、藤堂平助は消えていく。
沖田は何も言わず、何も発せず。
ただそれを直視出来ずに俯いているだけだった。
＊
「さぁ、落ち着いてマスター状況をしっかりと説明しますから」
「――あぁ」

オレはキャスターに言われるまま、あの目を覚ました部屋に連れられた。
相変らずこの部屋は昼間だというのに薄暗い。カーテンを全開にして欲しい気分も幾分かはあったが、薄暗い方が落ち着くような気もした。
オレは、キャスターに抱えられた腕を振りほどくと、無様に床へと転がった。
「――教えてくれキャスターオレは誰なんだ?」
「言ったでしょう?貴方はカルデアのマスター、藤丸立香です」
キャスターは平然とそれを言ってのけた。
「じゃ、じゃあオレの腕は!この腕はなんだ!まるで、ミイラみたいだ!それに、バーサーカーが言ってた。フィリップ、フィリップって誰だよ!なんで、その名前がオレに響くんだ!オレの体があの声を、感触を覚えてる!?教えてくれ、キャスター」
オレは叫んだ。体が裂けそうになるほどに。だが、相変らずキャスターは平然とした口調だった。一瞬、セイバーの言葉が脳裏を掠めた。
だが、それを真実としたらオレはオレでなくなってしまう気がしてならなかった。
「本当の事を言いましょう。マスター、貴方には呪いがかけられているのです」
「どういう事だ」
「虚構。実際にはない事を作り上げる。言ったでしょう?ここは虚構都市。全ては、聖杯を持ち魔人柱の力をも利用した奴らの仕業。逆転してしまっているんです。敵は、自らを藤丸立香と名乗り貴方から存在定義を剥離しようとしている。つまり、貴方になり変わろうとしているのです」
「な、そんな事!?」
「残念ながらそれが、事実なのです。彼らを倒さねば貴方は永遠に別の何かとなり消滅するでしょう」
キャスターの言葉はオレには衝撃的過ぎる事実だった。

まさか、この虚構都市がその様な仕組みであったとは、思いもよらなかったからだ。
つまり、敵は藤丸立香という存在になり変わり、世界を崩壊させることが目的なんだ。
キャスターの言葉が事実であるならば、オレに限った事象ではない。
やがて、この特異点が現実世界を侵食し全ての自称が虚構へと成り替わる。
全てが、事実を新しく造り変える事になってしまう。
「そ、そんな事させるわけにはいかない」
「ええ、おっしゃる通りです。だから、我々は彼らを倒さねばならない」
「勿論だ。ところで、敵というのは？」
「それは当然、今、貴方の振りをしている魔人柱達です。彼には今セイバーのサーヴァントがついています」
キャスターはそこで一旦言葉を区切った。
セイバー沖田総司もきっとオレの姿をした偽物に騙されているに違いない。
だが、今のオレに出来る事など何一つとしてなかった。
キャスターを卑下するわけではないが、彼女の戦闘力では到底勝ち目がない事など明白だったからだ。
「安心してくださいマスター。貴方はカルデアのマスターですよ？」
「え？」
「令呪です。無論、今のマスターは体が違うので腕には令呪がありません。しかし、貴方は数多の英雄と人類史を守ったのです。貴方も英雄といって過言ではありません。彼らと対峙した時、強く願って下さい。きっと、貴方に令呪が宿るでしょう。そうすれば、セイバーをこちらに引きつける様に命令してくだされば、いいのです」
キャスターは力強くいった。
オレはその迫力に気圧され頷く事しか出来なかったが、言われてみればその通りだと感心した。

何せ、オレは藤丸立香なのだ。体を弄られようとその在り方は不変のはずだ。
ならば、英霊は必ずオレに応えてくれるに違いない。
「キャスター、任せてくれ！必ず、奴から沖田を救い出してみせる。そうなれば、後はオレの偽物を倒すだけだ」
「ええ、その意気です。マスター」
そう言って彼女はオレに優しく微笑んでくれた。
＊
「……沖田」
「――――大丈夫ですよ、マスター。さぁ、バーサーカーを追いましょう。キャスター一人では心配です」
沖田は藤丸に背を向けたまま言った。藤丸も彼女の顔を見まいと背を向ける。
「あぁ、行こう。マシュ、キャスターの場所追える？」
「勿論です、先輩。そちらに居場所のルートを転送します」
藤丸は送られたデータを元に走った。沖田もそれに追走する。
二人が暫く行くと大きな通りに出た。
そこからは、海が見渡せた。ビルが引き締めあう、現代で見慣れた光景が過ぎ去った後に広大な海が顔を覗かせたのだ。
「先輩、もう少し言った先に――――」
「大丈夫。見えてる」
マシュの言葉を遮った藤丸の目に映ったのは現代とは不釣り合いなモノだった。
元よりこの場所にあったとしては、ランドマークとは言えない不気味さ。
何より、この一九八三年の横浜の地に、勿論、現代でもないがこんな大きな城などは存在してはいないのだ。
「行こう、沖田。マシュもサポートをお願い」
「勿論ですとも、沖田さんに任せてください」
「ええ、こちらもサポートに全力を尽くします」
「よし、行くぞ」

藤丸はその特異な城へと足を運ぶのだった。

7

偽物め。
盗人め。
憎らしい。憎らしい。
オレは憎らしい。
オレの全てを奪い、こんな哀れもない姿に変えた奴が憎らしかった。
憎悪に染まる思考と震える拳を握りしめオレは奴を睨みつけた。
その姿。その顔。
全てはオレのものだった筈だ。
それらを、オレから奪い平然と奴は藤丸立香を演じている。
悔しい。腹立たしい。
ならば、オレは奴から奪い返そう。
奴の虚構にまみれた皮を削ぎ落とし、オレはまた藤丸立香に戻ろう。
憎たらしい。藤丸立香め。
今は甘んじてこの醜態を晒そう。
だが、オレは貴様から藤丸立香を奪いとる。
＊
藤丸立香が重厚な造りである城の扉を開けた。
中は豪勢な出で立ちであった。
真っ赤に彩られた絨毯からは気品が感じられた。
だが、そんな室内とは裏腹に眼前には異質なオーラを放っていた者がいた。
彼は……
いや、彼を彼と形容していいのだろうか。
それは、人と言うにはその些か不都合なのかもしれない。
人の形は確かに成している。
だが、その顔面は爛れ、身体は細く骨が浮き出ていた。
そう、それを敢えて型に嵌めるのならばミイラの様だった。

更に藤丸にとって一番の違和感はそれの隣に立つキャスターの存在だった。
彼女は、只々不敵に笑みを浮かべていた。
「キャスター」
藤丸は眼前の彼女に声を飛ばした。
だが、それに対して彼女が何らかの行動を返す事はなく。
ただ、その隣に立つ、異形の存在へと視線を緩やかに送っただけだった。
その視線の先の異形は一歩踏み出す。その不条理な足をずるりと引きずるように。
そして、彼は右手を掲げて高らかに叫んだのだった。
＊
憎らしいほどにとぼけた顔に見えた。
眼前の敵は如何にも自身が藤丸立香と言う様に平然と立っていた。
許せる筈もなかった。
だから、オレは取り返す。オレの日常を。
オレは一歩踏み出す。
きっと、これは大きな一歩だ。
キャスターに言われた通りに強く念じる。あの偽物から令呪を奪い取る事を。
「さぁ、返してもらうぞおお。藤丸立香ァ」
オレは左腕を掲げて吠えた。
すると、何故だろう。オレの中の何かが唸った気がした。
それは、オレの体内で蠢き暴れ出す。
あぁ、間違いない。オレは間違いなく藤丸立香だ。
だからこそオレの中の何かがそれを取り戻そうと暴れ出しているのだ。
もうひと押しだと。オレは確信した。
目の前の偽物は只々、オレを見ているだけだった。
そうだ、そうしていればいい。お前はそこで立っていればいい。
オレがお前から全てを取り戻すさまを。

「来い、セイバー！」
瞬間、オレの視界は光に奪われた。
＊
「あれは!?」
偽物が驚愕の声をあげた。
オレは更に念じる。奴から令呪を奪い去る為。
だが、だが、なんという事だろうか。
それ以上待てどオレの中の輝きは寧ろ弱まっていく。
「何故だ！なんで……キャ、キャスター！何でだ！」
思わず振り返り答えを求めた。
だが、彼女はただ落胆した顔を浮かべオレを軽蔑した目で見つめていた。
「キャスター？」
「はぁ……もしやと思いましたが『やはり』だめでしたか。いえ、貴方が気に病むことはありません。所詮は、残骸から生まれた存在。貴方に期待した私が愚かだったのです」
「な、何を……言っているんだ？キャスター……オレが、オレは藤丸立香だろ？君がそういってくれた！オレは」
「はぁ？違いますよ、人類の敵でしょ貴方は。思い出せないのなら教えてあげます」
ヤメろ！聞きたくない！
オレは抵抗する様に耳を塞ぐ。
だが、そんな事は無意味だった。
彼女の声はオレの体内をまるで溶かす様にすり抜けてくる。
「虚構の存在よ。貴方こそカルデアのマスターに滅ぼされた魔神柱だった者。その残骸を再構築したのは私。貴方は藤丸立香などではない。無慙に散った魔神柱の一柱。その名はシャックス。それが貴方の本当の名前」
キャスターが吊り上げた口元を隠す事もせず、高らかに笑った。
オレを嘲笑うかのように、見下すかのように。
「オレは……嘘だ……嘘だ！嘘だ！嘘だ！嘘タァァァァァァァ」

叫ぶ。ひたすらに叫んだ。
だが、この場にいる誰一人としてオレに手を差し伸べる者などいなかった。
＊
藤丸立香と沖田総司、そして通信越しのマシュは獣の様な咆哮を聞いた。
そんな彼に彼らは哀れみの視線を向けた。
「マシュ？」
「間違いありません。あの方からは先ほど聖杯を感知しました。間違いなく彼が聖杯を持っています」
「魔神柱の反応は？」
「そちらは断言できません。ですが、微かに酷似した反応は示しています」
藤丸は視線をキャスターに向けた。
対する彼女は怪しげな笑みを浮かべているだけだった。
「キャスター、一体何をした？」
「私はまだ何もしていません。勿論、今からしますけどね」
キャスターは、蹲ったままの異形の者に近づくとその細腕を彼の背後から突き出した。
彼の肉は簡単に削げ、彼女の腕は彼の体内で何かを求める様に蠢く。
「あぁ、ありました、ありました。返して貰いますよ聖杯。寧ろ、感謝をして頂きたいくらいです。一度は滅した貴方をわざわざ復元させてあげたのですから。どうでした？自分達を滅ぼした人間の真似事は？楽かったでしょう？」
残忍な笑みを浮かべキャスターはその腕を引き抜くとその手には聖杯が握られていた。
その傍で異形な存在は糸が切れた人形の様に事切れた。
「さぁ、余興もここまで。本番を始めましょう」
「何が目的だキャスター」
「何が？つまらない質問ですね、マスター。簡単な事です。聖杯、そし

て私の宝具を使ってこの特異点を裏返すのです」
「裏返す?!どういみだ!?」
「わかりませんか?特異点とはそもそもあり得なかった歴史。ですが、それは同時にあり得たかもしれない世界。世界線の外に押し込まれた現実。この亜種特異点もその例外ではありません。叶わなかった線を虚構にする。つまり現実としてひっくり返すのです。歴史を。私の手によって。
私は女王。永遠の女王でなくてはならない。ですから、この手で私は私の国を作り上げる」
「そんな勝手が許される筈がありません」
マシュの怒気を孕んだ声に藤丸は頷き同意した。
そして、同時に弾かれた様に桜色の剣士が刀を携え飛び出す。
彼女は瞬時にキャスターに肉薄し、刀を突き立てた。
「とった!」
「あぁ、怖いこわい」
言葉とは裏腹にキャスターは余裕の笑みを浮かべた。
事実、沖田の刃はキャスターに届く事は果たせなかった。
肉薄していた筈の二人の距離は気がつけば数メートルに広がっていたからだ。
沖田が距離を見誤った訳では決してない。だが、現実として沖田の刃は空を切った。
「不思議でしょう?でも、おかしな事はありません。ここは、私の領地。私の城、私の国、私の世界。これこそが私の宝具。聖杯によって強化された私の世界」
「――王(ソロ・ヨ)は我のみ」
キャスター魔力が聖杯により底上げされる。それが、溢れ彼女の周囲で渦を巻いた。
風景が一変された訳でもなく視覚的に変化が見て取れる訳ではなかった。
只々、目の前にいる異様な魔力を纏ったキャスターは不敵に笑う。
それが、藤丸らにとって不気味以上の何物でもなかった。

「先ほど沖田さんの攻撃を躱した様に。キャスター自身の発言を顧みるに、この城、いえ、この特異点までもが彼女にとって都合の良い様に塗り替え続けられているのではないでしょうか？」
マシュが落胆と驚愕の声をあげた。
「だとしたら無す術がないじゃないか！何か！何かできる筈だ！」
「ええ、その通りですマスター。もう一度仕掛けます！」
沖田は再びキャスターへとその刃を振るう。
「その攻撃は届きません」
キャスターの発した声は現実を彩った。
二度放った沖田の刃はまたしても空を切る。
「無駄です。無駄ですよ。何度やろうとも同じ事です。わたしは女王。全てを管理、統治する者。私の国を終わらせる事は何人足りとも不可能。何故なら私は永遠の女王なのだから！さぁ、マスター死んでください。私の望む、私の創る国に貴方は必要ないのです！」
瞬間、藤丸の視界が歪む。
「――――ぐっ」
それを懸命に堪えようとするが、気が付けば彼の視界は一人の女に染まっていた。
女は笑う。女は残忍に笑う。
その手に持った杖は凶器となり、その笑顔は狂気を孕み。
キャスターは藤丸にそれを突き立てんとする。
「マスター」
だが、それを寸での所で沖田は食い止めた。
彼女は続けざまに剣を振るいキャスターを退けさせる。
「キャスター。貴女の認識する全ての物が貴女の国だというのならば。その認識の外に飛び込むまで」
「そんな事が出来るのかしら？いいえ、出来るはずがないわ」
沖田の言葉にキャスターは高らかに言う。自らの国がたった一人の剣士に振りきれる筈がないと。
「マスター、魔力を回してください。畳み掛けます」
「あ、ああ！」

沖田は刀を水平に構え、三段突きの態勢へと切り替える。
藤丸もそれに合わせ彼女に魔力を付属させる。
「――行きます！」
一歩、彼女が駆ける。
二歩、三歩。沖田はキャスターに接敵する。
「――無明三段突き」
放たれた回避不可能な剣技。だが、それですら。
沖田の必殺剣ですらキャスターの体に触れる事すら出来なかった。
「残念ですね沖田さん。その技も私に当たらなければ意味がない。策は尽きましたね。まずは、貴女から消して――」
「いいえ、これでいいんです。いいんですよね？」
「何を？」
「言ったでしょう？認識の外からの攻撃と」
不敵な笑みを浮かべたのは沖田の方だった。自身の必殺剣が外れた事すらも想定内だと言い切り、彼女はキャスターを見据えた。
いや、キャスターの奥。その奥の何かを沖田総司を見据えたのだ。
「――あぁ。十分だ」
男の声がした。それは、今にもこと切れそうな弱く小さな声。
だが、それは決意をした決死の声。
「――お前は！」
「おせぇ――おせぇよ、キャスター」
声を発した揺れる影。キャスターは即座に振り向く。
だが、それは彼の言う通り遅かったのだ。
青い段だら模様の羽織が揺れる。
その手に持つ刀は鋭く。その刃はキャスターの胸部を貫き刺したのだ。
「お前は……アサシン。何故？なんで？お前は？貴方は死んだ筈？」
鮮やかな鮮血を口元から零し、キャスターは驚愕の顔を浮かべた。
「何言ってんだ？俺達なんてのは元々死んでんじゃねえか。いや、まぁいい。そんな事はどうでもいい」
「ふ、ふざけないで！私はまだ死ねない！死なない！私は女王よ！私

が女王なの！お前みたいなただ武器を振るうだけに野蛮人に！私を殺す？ふざけないで！」
「――あぁ、ふざけてなんかないさ。俺の目的はただ一つだ。それは、何度生き返ろうと不変。俺は勤皇の志を決して違えたりはしない。いいや、違う。お前などが王では、お前の国ではアイツに相応しくない。女王フアナ。お前は俺にとって倒すべき存在だ！」
アサシン、藤堂平助はその刀をキャスターから引き抜き、もう一太刀彼女の胴体を切り裂いた。
「――嘘。嘘、嘘、嘘。私の国が、私の地位が、権力が、世界が。消える。消えてゆく。あぁ、何故。何故、な……ぜ」
キャスター、女王フアナの体は消えてゆく。
最期は、嘆きを口にして。キャスターのサーヴァントは消滅した。
「――藤堂さん」
「さて、俺も行くわ。もうこうして立ってんのもつれぇ」
彼の言う様に既に体は消えかかっていた。
「藤堂さん、私は――」
「何も言うな。俺もお前も目的の為に殺し合った。それだけだ。――まぁ、機会があれば俺もカルデアに呼ばれてみるわ。そっちのお前は今回の記憶はねぇだろうけど」
「いえ、そんな事はありません。今回の件は必ず私の霊気に刻んでおきます」
「そうか、じゃあな総司。一つ忠告だ。まだ今回の特異点はおわりじゃ――」
「あぁ、まだ終わっていない」

アサシンの言葉は最後まで発せられる事はなかった。
完全に消滅したアサシンの背後に影が蠢く。
その存在はこの場にいる全員が呆気にとられるほど想定外の存在。
藤丸は、只その存在を睨みつけ、その存在の名を怒りの声で放つ。
「シャドウ……サーヴァント」

8

「セイバーなんで？」
目の前にいる影にオレは問いかけた。彼は当然の様にオレの横へと佇む。
「何故って君が呼んだんだろ？」
呆れたと言わんばかり表情でセイバーは言う。
「そうか」
何故だかひどく安心した。居心地が良いと言うべきか。彼とは僅か二日しか関わりがないというのに。
「さて、どうする藤丸くん？」
彼の声に思わずはっとした。
目の前に転がる聖杯。それを挟んで対峙する藤丸立香とセイバー沖田総司。
まるで鏡合わせの様だと苦笑する。
ただ、残念な事に歪で間違っていて不安定なのはこちら側だ。
人外、そもそも魔人柱とされたマスターとなりぞこないのシャドウサーヴァント。
一体、オレ達に何が出来るというのか？何をしろというのか？
この目の前にある聖杯に手を伸ばせばそれが分かるのならば。今すぐにでもそうしたい気分だ。
無意識に伸ばしていた手を引っ込める。オレが結局何がしたいのだろう。
何をすればいいのだろう。だが、この聖杯には確かに魅了されてしまっている。
「何を躊躇している藤丸くん」
セイバーが横で言った。
コイツの考えがまるで分からない。
そもそもオレは彼の事は全く知らない。知っている事と言えば音楽にうるさい事くらいだ。
「セイバー……怒っていないのか？」

「何故？」
「オレは君の言う通り、君の推理通り化け物なんだ。魔人柱らしい。勿論、そんな自覚はないけど。でも、オレはきっと本物の藤丸立香ではないと思う」
「それで？」
「それでって？お前、オレの話を聞いてなかったのか？オレは、化け物だ。この見た目もそうだ。オレは……オレは人類の敵なんだぞ」
「……それでも、君は僕のマスターなんだろ？」
　表情一つ変えずセイバーは言う。そう、ごく当たり前にいうのだ。
「今の君は何者でもないよ藤丸くん。そう、今の君は何にだってなれるのさ。何もないなら簡単だ。そこに何かを入れるのはね」
「……そうなのか？」
「あぁ、肝心なのは君がどうしたいのか、だ。どうなりたいんだ藤丸くん。それを叶える願望機は君の目の前にある。さぁ、選びたまえ。君はどうしたい？」
　セイバーの声がより強くなった。彼の考えはやはりよくわからない。
　キャスターの様にオレを利用しようとしているのかもしれない。
　ただ、それでもいいと思った。なんだっていい。何者だっていい。
　オレはオレ自身で自分の存在を勝ち取ってみたいとい思ったのだ。
＊
『先輩!!』
　マシュの悲鳴にも似た声が飛んだ。藤丸立香もその存在には気づいている。
　いや、気が付かないはずがない。目の前で肥大する人間の形をした何かは、たちまち人類悪へと顕現していた。紛れもなくそれは、魔人柱だったのだから。
「こっちで動けるのは沖田だけ……」
「私はいつでも行けます。死なばもろともですよ」
　笑ってみせた沖田だが疲弊しているのは目に見えている。
『立香君、今顕現した魔人柱だが本来の力はまだない。データで見る

なら酷く低い数値と言えるだろう。叩くなら今だ。』
ダヴィンチの声に藤丸立香は拳を握り令呪を三画重ねて沖田を援護する。
「セイバー」
「わかっています」
神速の剣。沖田総司の必殺剣が発動した。
＊
意外と痛みは感じなかった。
それは元々自分達が虚無だったからなのか。それは、わからない。
ただ、痛みはなかった。むしろ、すっきりとした気分だ。色々と体から抜け落ちたように。
聖杯を自らの意思で掴んだ瞬間。
全てを思い出した。
自身の存在を。そして、自分達は敗れた事も。残骸だった自分を再構築したキャスターの事も。それでもなお、オレは自らを魔人柱として定義できないでいた。
何せそんな事言っても今のオレには説得力がないからだ。
「何故庇ったんだい？藤丸くん」
「何でって？当然じゃないか　君はオレの友人だろう？」
「馬鹿なやつだ」
目の前でセイバーは憤慨していた。オレにはその理由がよく分からない。もう思考なんてまともに動かないのだ。自分の存在が世界から切り離されるような感覚。
心なしか苦しいとかそう言った感傷は全くなかった。
沖田総司の剣は中途半端に顕現したオレの体をいとも簡単に刺し貫いていた。
オレは何とかセイバーに被害が及ばないように彼の前に立ったはいいがあっさりとやられてしまった。
何も分からない。結局、足が浮ついている。自分の足が地につかないような感覚。
きっと、これが魂が抜けるって感覚なのだろう。

あぁ、ハッキリと分かるのは自分が死ぬって事くらいだ。
「最期にセイバー、名前を教えてくれないかな？このままじゃ死んでも死にきれない」
「――――御手洗だ。御手洗潔。おてあらいって書いてみたらいと読む。潔は、清潔のけつ」
「なんだか綺麗な名前だね」
「笑うな、僕のトラウマだ」
「いや、本心で言ってるよ　ありがとう御手洗。ほんの二日だけだったけど、君との時間は楽しかった」
「君に対して僕は胸を張れないよ」
「いいよ。御手洗」
「君は聖杯を持ち尚且つ、魔人柱でありこの虚構の管理人。この世界は君の死を持ってでしか終われない」
「じゃあ、君は初めから分かっていたの？」
「いいや、そうじゃない。ただ、出来れば楽な死を与えたかったけど、僕には出来なかった」
「じゃあ、この結末は君の望むものなのかい御手洗」
「……結局、カルデアのマスターに滅ぼされるしか方法はない。人類において君の消滅は最善手だろうね。君一人を生かす為にこの特異点を存続させるのは傲慢だ。いずれこの特異点は肥大し、現実を覆い尽くす。逆転するんだ。虚構の世界と現実の世界が。君を生かしておくわけにはいかない」
「正義感が強い男だね、君は」
「どうかな？せめて僕がまともなサーヴァントなら少しはやりようがあったかもね――――すまない、藤丸くん」
「でも、ほっといてもオレは簡単に殺されていただろうね。わざわざ、聖杯を与えた意味はわからないな」
「君は僕にとって依頼人だ。依頼人には知る義務がある。事件の真相をね。最も、今の僕にそんな義理を言えた筋はないけど」
「そんな事はないさ」
「そうか。では、あえて聞こう。魔人柱シャックスよ、人間が憎いかい

?」
「……」
「……」
「――――アァ、憎いさ。人間如きが我が魂を弄び転がしたことにな」
「なら、問題ない。他人を恨むなんて最も人間的思考じゃないか」
御手洗はそっけなく言った。
だが、オレにはとても温かみの有る様に思えた。
この男は初めから全て考えての行動だったのだと納得した。
「――――そうか、そうだね。ありがとう。オレの友人、御手洗潔」
「あぁ……さようなら僕のマスター。せめて、安らかに眠ってくれ」
＊
「魔人柱の消滅を確認。先輩、直ぐに帰還を」
マシュの声に藤丸は適当に返事を返した。それは、目の前で起きた光景に疑問を持ったからだった。最後の沖田による攻撃、藤丸の目には魔人柱がシャドウサーヴァントを庇ったようにしか見えなかったからだ。
「沖田!?」
藤丸の中には言葉にならない感覚が沸々と湧き上がる。その正体は分からない。
この特異点ははっきりいって脆すぎたのだ。釈然としない。その答えが分からない苛立ちをぶつけるかのように、藤丸はサーヴァントの名を叫んだ。
「どうしました、マスター?」
沖田は振り返って笑顔を見せる。だが、その身体は既に消えかかっている。当然だ。特異点が消滅するのだ。ここで召喚されたサーヴァントも座に戻るのだろう。
「いや……その、ありがとう」
「いえ、こちらこそ。カルデアにも私がいるんですよね?そちらの私もよろしくお願いします」
そう言って最後まで微笑みを絶やさずセイバーは消えた。
「聞けるはずないよな」

心の内の靄は取れない。藤丸は最期まで自身に協力してくれたサーヴァントにも満足に礼を言えずに自らの世界へと帰還する。

＊

目を開けるといつもの風景があった。マシュやダヴィンチが藤丸を出迎える。

だが、藤丸は釈然としない表情のままだった。

「先輩、どうかしました？」

「いや、なんだろう。分からないんだ。今回の特異点はその、なんか簡単すぎるというか」

何とか心中を口にしようとするが、言葉がまとまらず喉が詰まる。

「お疲れさま、藤丸くん。今回の特異点はどうだった？」

ツカツカと足音を鳴らし藤丸の前に出たのはシャーロック・ホームズだった。

「いや、何だろう、分からないんだ。肩透かしを食らったというか」

「ははっ。それは驕りだね。藤丸くん」

ホームズは満面の笑みで答えた。一方で、藤丸はそんな事はないと苦い顔をした。

いいかい？とホームズは断りを入れた。ここに居る誰もが、拒絶したところで話すだろうと呆れながら頷いた。

「君は確かにまた一つ世界を救った。だが、だとしても君を中心に世界があるわけではない。この世界で生きている一人一人が自分を中心にいきて世界がある。誰しも英雄になれるし　悪魔にもなれるということさ。犯人を捕まえれば僕は被害者からみれば英雄さ。でも犯人からみれば厄介な悪魔だろう」

「でも、ホームズは正しいことをした。俺だって世界を救った筈だ」

「いったろ？藤丸くん。世界のルール、常識、道徳に僕達はあくまでのっかているだけさ。世界の意思が僕達を裁くのか？違う。人の生も死も一人の意思で決まってしまうのが世の中だ。誰しも犯人なってしまうし、英雄にだってなれる。勘違いしないことだ。君は世界を救った英雄だがそれは結果だ。世界を滅ぼすのは悪だという考え方も人々の意思が引いた理論的価値観の上での常識だという事を忘れ

てはならない」
「……」
「あぁ、気にすることはない。別に責めているわけではないからね。ただ君が救った世界には滅ぼされた人々の願いだってあったという事を忘れないでほしい」
「ミスター・ホームズ。先輩だってわかっています。だから、今回の特異点でも被害を抑えようとしていました」
たまらずといった顔でマシュが口を挟んだ。ホームズはそれを一瞥して言葉を続けた。
「気まぐれだよ。ミス・キリエライト、忘れてくれていい。ただ、僕も一目会って見たかっただけさ」
「――――誰に？」
「東洋のシャーロック・ホームズにね」
＊
「最後までモノを言わないとはね、ホームズ」
廊下を歩くホームズの道を遮るように、犯罪界のナポレオンは彼の前に立ち塞がった。
「君に僕の何が分かるというんだ、モリアーティ？」
ホームズは彼を一瞥するに留まった。一方の、モリアーティはその態度に軽快に笑って返事をした。
「そう怖い顔をするんじゃない、少し君とお話したかっただけサ」
「僕は君と話す事など何もないが？」
「ほう？では、君の興味を少しは引こうではないか。藤丸立香についてだ。君の考えをあてて見せようか？」
「……」
「無言は肯定と判断するよ。では、藤丸立香について君はこう考える。彼は、とても危険な存在だと。彼は悪を憎まない。どの状況においても常に『正解』を導き進んでいく。それが、どんなに恐ろしい事か」
「――――君も同じ考えだろう？だったら、僕の考えを代弁したなどの戯言はよせ。君の言葉で言えばいい」
「ハハッ。それもそうだネ、シャーロック・ホームズ。では、我々はこ

う考えた。藤丸立香の判断が世界を導いている。今は、特異点を救うという理由付けこそ存在するが、結果として世界の線とも言うべきか、幾重にも枝分かれしていく世界を彼一人が決めていく事になってしまっている現状だ。これは、紛れもなく異常だと私は思うがネ」
「それが、どうした？」
「わかっているだろう？彼は間違いなく世界の中心にいるんだ。彼の決定が世界を塗り替える。君が彼に言いたいのは判断を見誤るなという事だ。そして、それでいても尚、彼は英雄などでは決してない。」
「それは逆説的な考えだ教授。本来の線にカルデアは戻しているだけだ。特異点が本物だと世界が認めない限り、彼が世界を決めている事にはならない」
「――目の前の存在が悪だとは限らないだろう？ホームズ。君だって個人の裁量で犯人を匿ってきた。だが、藤丸立香の双肩にかかるのはたった一つの小さな事件如きではないだろう？あぁ、そうか。君は嫉妬しているんだネ？今の君はただの使い魔に過ぎないからね。君はここでは只の脇役でしかないのだから」
「それが言いたかっただけだろう君は。所詮、僕らは伝説、逸話の殻を被って現界している半端ものさ。それこそ、僕達は世間の声が作らせた虚構にしか過ぎない。ならば、世界が想像し、創造した存在を演じるだけさ――失礼するよ教授。君の与太話に付き合っている暇はない」
　ホームズはモリアーティの横を過ぎ廊下の奥へと消えていった。
「――虚構。言うじゃないかホームズ。だが、君は満足できるかナ？人類を賭けた大事件だ。それが簡単に無くなってしまえば退屈すぎるというものサ。精々、祈るといい。彼が、世界線自体を定める裁定者にならん事をネ」

１９８３　横浜

私の友人は奇天烈だが今日は一段とそれが増していた様に思う。

その日、彼は寝室からでてくるとソファに座りぼんやりとしていた。突如、声を荒げて立ちあがったと思うと、違う！といい部屋をぐるぐると回り出したりしていた。

私は、何時もの事だと考えてそれを黙って眺めていると、彼は私に言ってきた。

「夢をみた。ありえたかもしれない未来の夢だった。そして僕は世界が救われたのをみた」

「いったいなんの話だい？」

「だから言っただろう。夢の話だ」

「はぁ」

私はため息をついた。

だが、世界が救われたなんて大層な事をいったものだ。彼にしては珍しいと思った、。

「石岡くん、もしものはなしだよ」

「あぁ」

私は適当に相槌をうった。

「真剣な話だ！」

「あぁ！」

彼が急に怒鳴ったので私もビックリして大きな声を出した。
「もし僕が死ななければ世界が崩壊するかもしれないとなったら君はどうする？」
彼は至極真面目にいうので私は真剣に考える。
その間、彼は私の顔をチラチラと見ては、はやく、と答えを急かした。
「その……君が死ななければならないんだな？」
「そうだと言ったじゃないか」
「なら、僕は君を殺す」
すると彼は驚いた様に目を見開くと、なぜ？、と聞いてきた。
「だって、君が死ななければ何千と人が死ぬんだろ？なら――――」
「なんて奴だ。君は僕と世界中の人の命を天秤に掛けたのか！最低だ！薄情だ！」
ありったけの罵声を浴びせられた。
私は、苛立つ気持ちを抑えて言葉を続ける。
「まぁ、落ちつけよ。僕だって何とか君が死ななくてすむ方法を考えるさ。でも、どうしようもないんだろう？だったら、何とかするしかない。もう死んでもらわなきゃ助からない」
「ほら。やっぱり！」
「む！出来るわけないだろ！友人の君を世界を滅ぼす大虐殺人になんて！そんな、業を背負わせるくらいなら僕が君を殺して一人で罪を被ってやる」
つい熱くなってしまった。
気がつけば私は立ち上がり彼の両肩に手を乗せていた。
彼は眉間に皺をよせ思案顔をしたりとコロコロと表情を変えたりした。
すると、両肩に乗った私の手を握りしめてこういった。
「ありがとう。石岡くん。やはり、君は僕の友人だ。僕は嬉しいよ。良かった、僕は間違えてなかったみたいだ」
満面の笑みで私の両手を持ったまま掴んで離さない。
彼が喜ぶ傍らで私は自分が言った言葉が急激に恥ずかしくなり耳

まで赤くなっていただろう。そんな私の心境を彼が見逃す訳がなかった。
「ところで今のは何の恋愛小説から引用したんだい？随分と恥ずかしがっている様だけど。自分の言葉には責任を持ってほしいね。後悔するくらいなら初めから言わない事だ」
内心、私はハラワタが煮えくり返る思いだった。真剣に答えろというから答えたのにこの仕打ちはなんだというのだろうか。
一方で、彼は上機嫌な顔で鼻唄を歌っていた。
「あぁ、一つ言っておこう。君に僕は殺せないだろ。君にそんな度胸もない。あと、一番の問題は相手を納得させて殺すべきだ」
「な、なんだよ、唐突に」
「いや、何も。あぁ、そうだ。石岡くん。犬を飼わないか？」
唐突だった。
私は思わすコメカミを抑えた。
もう彼の中では先ほどのやり取りなど忘れ去られているだろう。
私は仕方なく、なんで？、と尋ねると彼は答えた。
「問題ない、名前も既に決めてあるんだ」
答えになってない事などもう指摘する気もさらさら失せたので私は投げやりに聞いた。
「へぇ、なんて名前にするんだい？」
「――シャックス。遠い未来。あり得ない未来で世界を滅ぼす悪魔の名前さ」
私は、物騒な名だ、とだけ答えた。
すると情緒不安定のキチガイは俯いて独り言の様に呟いた。
「あぁ……いもしない僕の友人だった男の名だ」
御手洗の横顔が窓ガラスに映し出される。外は、冬の風が吹いていた。枝から落ちた枯れ葉が空高く舞い上がる。それを悲し気に私の友人は見つめていた。